

第3章 拠点校の研究開発の内容・活動実績

3.1 地域創造と人間生活（高校1年次）

3.1.1 課題を知る学習

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①では自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③ではイラクでエイドワーカーとして活躍する高遠菜穂子氏などの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、未来創造探究に繋げてきた。中高一貫生が高校に入学して2年目となる今年度は、学びのさらなるバージョンアップを目指し、探究のスタートアップをさらに3ヶ月早め、夏休み明けから実施し、演劇と探究の接続を丁寧に行った。

(1) 実施内容

① 地域創造と人間生活 オリエンテーション

新入生への課題として「自分史」を実施し、これから地域やそこで生きる人々と出会う前に自分のこれまでの人生を振り返ってもらった。入学式後すぐに、クラスの関係性作りのためのコミュニケーションWSを実施。その後この授業のオリエンテーションを行った。改めてこの学校が設立された経緯や、この授業で身に付けてほしい力について共有した。そして、これから地域と出会う前のイントロダクションとして、双葉郡の紹介を丁寧に行った。

身に付けて欲しい力

目標

地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成する。

社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う

地域社会の変化を多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく

自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、主体的に学び続ける能力と態度を養う

② 双葉郡8町村バスツアー

日時：4月28日（金）終日

講師：

1号車	檜葉町 広野町	磯辺吉彦（広野わいわいプロジェクト）
		青木裕介（広野ふらっとあっと）
		平山将士（一般社団法人ならはみらい）
2号車	富岡町	青木淑子（富岡町3.11を語る会）
		平山 勉（ふたばいんふお）
		明石重周（J-Village）
3号車	双葉町	半谷裕明（双葉高校野球部OB）
4号車	葛尾村 川内村	下枝浩徳（一般社団法人葛力創造舎）
		一般社団法人かわうちラボ
5号車	双葉町 大熊町	佐藤真喜子（一般社団法人おおくままちづくり公社）
		南郷市兵（大熊町立学び舎ゆめの森）
		増子啓信（大熊町立学び舎ゆめの森）
6号車	浪江町	柴口正武（元なみえ創成中教諭）

行程：

1号車 檜葉町・広野町

【午前：檜葉】

みんなの交流館ならは CANvas 着 ～ 檜葉町案内(み

るーる天神、J-Village、笑ふるタウンならは) ～ 地域活動拠点施設「まざらっせ」見学 ～ 藍染め体験及び地域住民との対話

【午後：広野】 柏屋にて昼食、広野周辺散策

2号車 富岡町

富岡高校 ～ 富岡町周辺案内 ～ 学びの森(青木先生の口演) ～ ふたばいんふお(昼食) ～ とみおかアーカイブミュージアムへ ～ J-Village ～ 学校

3号車 双葉町

双葉駅周辺(Overalls 壁画アート)～ 双葉高校 ～ 双葉町産業交流センター(昼食)～ 東日本大震災・原子力災害伝承館見学

4号車 葛尾村・川内村

【午前：葛尾】

葛尾村周辺案内 ～ 旧葛尾中学校校舎にて WS

【午後：川内】

村内にて昼食 ～ 川内村周辺案内

5号車 双葉町・大熊町

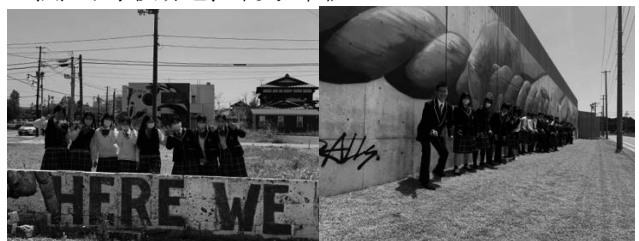
【午前：双葉町】 双葉駅周辺(Overalls 壁画アート) 東日本大震災・原子力災害伝承館見学

【午後：大熊町】

Link 大熊にて昼食 大熊町周辺散策(内容検討中) 学び舎ゆめの森の先生の口演

6号車 浪江町

大平山霊園 ～ 請戸小学校 ～ 請戸漁港 ～ 道の駅なみえ(昼食)～ 浪江町周辺案内(スポーツセンター、浪江駅、浪江小学校跡地、中央公園)



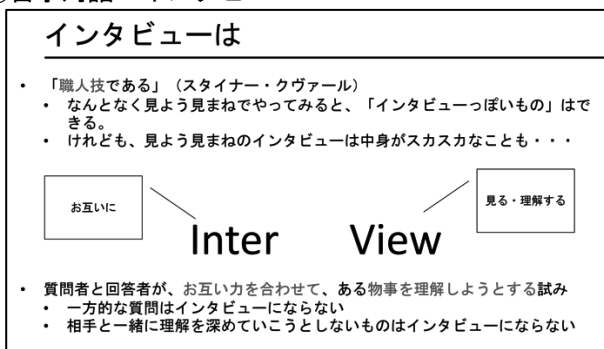
概要：

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを毎年実施している。今回は、8町村を6コースに分けて、1日かけて双葉郡を歩いた。今回は、トップアスリート系列の生徒専用のコースを作り、例えば野球部は双葉高校へ行き、野球部OBの方から直接当時の話を聞き、ふた

ば未来への想いを聴く機会を設けた。サッカー部は富岡高校を訪れ、実際に国際スポーツ科を設立した当時の校長先生から貴重なお話を聴くことができた。他にも、4月に開校したばかりの大熊町の学び舎ゆめの森を訪問するなど、これまでにない新しいコースの実現もできた。

本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来故郷を初めて訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、12年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。

③哲学対話×インタビュー



演劇創作のための取材をする前に、インタビューとは何かという視点で対話を行った。開智国際大学の西山溪氏を講師に迎え、インタビューとは何か、そもそもどんな時にインタビューをするのか、インタビューにはどんなタイプがあるのか等を学び、実際にグループで役割を決めて対話型インタビューの練習を行った。実戦を通して、相手がよりリラックスして応えられるようにするため、また相手の気持ちや考えをより深く理解するためには、良い質問をすることが大事だということを学んだ。

④演劇班取材

インタビューの練習を経て、実際に演劇のための取材を行った。対話型インタビューを意識しながら、取材をすることができ、演劇創作に向けて中身の濃いインタビューを行うことができた。また、全員が役割分担をしながら主体的にインタビューに参加したことで、取材相手の地域の方々との間に良い信頼関係を築くことができた。



⑤プチ探究

夏休み明けから始まる未来創造探究に向けて、そのトレーニングとして演劇創作と並行して、プチ探究を実施

した。まずは探究のサイクルを体験してもらうため、自分の「気になるもの」を決めて、何かしらアクションをして、結果を振り返り提出するという課題を出した。1回目は6月に実施し、2回目は夏休みの宿題として実施した。テーマは自由としたため、仲間同士の知的好奇心をくすぐるものばかりとなった。夏休み明けには表彰式を実施した。

◆ベストアクション賞

「検証!『常磐線の魅力』1日で全てまわれるのか!」
「広野町の海沿いをゴミ拾い」

◆ベストクリエイター賞

「アーティストの曲名と絵を合体する」
「かわいく魔法」
「古着を使ってわんちゃんの洋服を作ってみた!」
「自分の頭の中を演劇にしてみた」
「カップケーキを作ってみた」

◆ベストラーニング賞

「適当にピアノを弾いても良い曲に聞こえるのか!」
「牛乳を使って環境にやさしいプラスチックを作ってみました!」

「他者理解への第一歩」

◆ベストリサーチ賞

「興味のある論文を読んでみた」
「STONES of Rivers〜川の石大調査〜」
「体育座りに着目してみた」
「AIを使ったボーカロイドを作ろう」
「名探偵コナンの犯罪について」
「普段の練習で女サカの皆はどれくらい集中力がつづいているのか」
「アスリートにとって大事なもの」
「十円玉を綺麗にするにはどうすればいいか実験」

◆ファーストペンギン賞

「広野の海沿いをゴミ拾い」

生徒感想より

「まずは身近なテーマでプチ探究をしてみて、とことん調べたりアクションをおこしたりすることが楽しいと思うことができた。」

「好きなことを探究することでどんどん知りたくなった。これから実際に探究が始まるが、どうせやるなら楽しんでできるように、テーマを見つけていきたい!」

(2) 成果

新型コロナウイルスが第5類に移行し、完全にコロナ前のような活動ができたことは嬉しいことである。同時にコロナ禍に普及したICTを活用して学びの共有を有効に行うこともできた。プチ探究を2回実施したことで生徒たちの興味・関心を知ることができた。

(3) 課題と展望

今年は4月にバスツアーを実施し、入学後すぐに地域と出会う機会を持つことができた。生徒たちそれぞれがこの地域で学ぶ意義について考えたようである。コースの打ち合わせなどの事前準備が大変ではあるが、その分生徒たちの学びは大きいので、引き続きそれぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

3. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が 20 班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡 8 町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク(FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、地域の方を取材し、聞いた話を持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決の難しい課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後展開される未来創造探究(探究活動)を通じて探究することになる。今年度は哲学対話を入れた。対話を通してそれぞれが取材や演劇を通して感じたことを言語化しながら問い、深めていき、さらにリッチピクチャーを使って自分達の演劇作品を構造化し、探究への問いづくりへ繋げた。

(1) 目的

- ① 学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材 (FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	5月2日(火)	5・6	演劇班によるWS①	○
2	5月10日(火)	終日	演劇オリエンテーション	○
3	5月23日(火)	5・6	哲学対話×インタビュー	○
4	5月30日(火)	5・6	演劇班WS② 取材先を決める	○
5	6月6日(火)	5・6	演劇創作のための取材	
6	6月20日(火)	5・6	取材の振り返り&FWに向けた準備	
7	7月4日(火)	終日	演劇創作のためのフィールドワーク	
8	7月11日(火)	5・6	演劇班WS③	○
9	7月18日(火)	5・6	演劇班WS④	○
10	7月24日(月)	終日	演劇創作WS⑤・中間発表会	○
11	7月25日(火)	終日	演劇成果発表会	○
12	夏休み		プチ探究	
13	8月22日(火)	5・6	演劇振り返り&分析・リッチピクチャー作成	○
14	8月29日(火)	5・6	哲学対話「結局、演じるとは何だったのか？」	○
15	9月12日(火)	5・6	哲学対話「みんなの問いは？」	○

(3) 講師

平田オリザ(青年団主宰 劇作家・演出家)

わたなべなおこ(劇団あなごーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)

森内美由紀(青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠理(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

石本 径代(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

金 恵玲(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

村田 牧子(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、館 そらみ(脚本家・演出家)

北村 耕治(俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

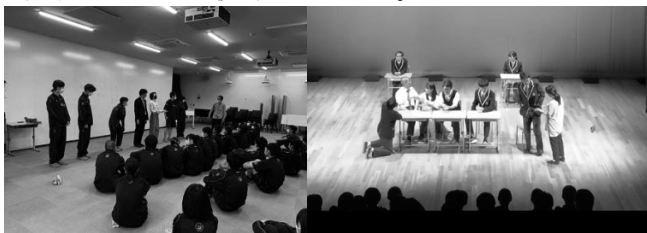
1 学年生徒 148 名 20 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1・2 演劇WS、オリエンテーション

昨年度に引き続き、演劇班編成にあたり、意図的にクラス・部活動・一貫生/高入生などバラバラなメンバーが混在するように工夫した。まずは班のチームビルディングのためのコミュニケーションWSを丁寧に行い、後半は演劇を通して地域課題を知ることの意義について体験を通して学んだ。身体を使ったゲームや、台本を使った短い演劇体験を通して、イメージを共有することの難しさや、人それぞれに価値観が違うことを楽しみながら学び、そこから福島の問題にも結びつけて考えた。

授業の最後には、生徒たちをシアターに集め、プロの俳優である講師の方々と、担任教員による演劇発表があった。生徒だけでなく、教員も舞台上に立って表現をする姿を見せることで、生徒たちのモチベーションに繋がればという思いから実施しているが、事前に何も知らされていなかった生徒たちは教員の登場に大いに湧き、最後まで集中して観劇を楽しんだ。演劇が学校全体の文化として浸透した成果と言える。生徒の感想には「初めてプロの演劇を観た。喜怒哀楽をはっきり表現していて格好良かった。」**「制服姿で出てきた先生方を見て、びっくりしたけど、先生たちが高校生だった頃を想像した。今までより身近に感じる事ができた。」**「伝えたいことが観客に正確に伝わるように、私も恥ずかしがらずに堂々と演じたい。」といった感想が多く、これから成果発表会に向けて大きな後押しとなった。



3 取材先を決める

演劇の班ごとに希望を取り、地域で様々な分野で復興に携わる方々の中から生徒達自身が取材希望先を選んだ。これまでお世話になった方々に加え、毎年地域との新たな繋がりも増えている。また、年々生徒たちの興味関心も深く、今年度はより明確に「この人にこのことについて聞きたい」という目的を持って取材先を選ぶ班が多い印象を受けた。取材先は右のとおり。

4・6 演劇創作のための取材・FW

演劇の題材を探す(地域の課題を発見する)ために、2回インタビューを行った。1回目は学校に来校いただき、2回目は生徒達が現地に赴いた。お話を伺うだけでなく、実際にその場所を見ることで、より強くイメージを共有することができた。

様々な試行錯誤を重ねてきたこの授業だが、地域の方々の協力なしには成立せず、今回も様々な資料等を用意してくださり、FWの際には生徒達により伝わるようにツアーを組んでくださるなど、伝え方を工夫してくださった。この場を借りてお礼申し上げたい。生徒たちは事前に調べ学習の中で考えた質問内容を演劇コミュニケ

ーションWSにて更に掘り下げたのちにインタビューを行った。ただ用意した質問をするだけでなく、相手が答えた内容からさらにストーリーを引き出すことができた。さらに、2回目に実際に現地を訪れ、語られた言葉とその場所を重ねて震災当時に思いを馳せることができたことは、その後の演劇創作に真摯に打ち込む生徒達の姿勢に繋がったと感じる。

	FW先
1班	小泉良空さん(大熊町・一般社団法人ふたばプロジェクト)
2班	松本佳充さん(浪江町・双葉高校元教員)
3班	志賀風夏さん(川内村・Café&Gallery 秋風舎)
4班	田村善孝さん(双葉町・東京電力福島復興本社)
5班	増子啓信さん(大熊町学び舎ゆめの森)
6班	鈴木謙太郎さん(楡葉町・木戸川漁協)
7班	平山 勉さん(富岡町・ふたばいんふお)
8班	明石重周さん(楡葉町・株式会社 J-Village)
9班	菅野孝明さん(浪江町・まちづくりなみえ)
10班	神崎克訓さん(大熊町・鹿島建設株式会社・除染解体作業)
11班	滝沢月子さん(富岡町)
12班	下枝浩徳さん(葛尾村・葛力創造舎)
13班	磯辺吉彦さん(広野町、ぷらっとあっと)
14班	中井俊郎さん(楡葉遠隔技術開発センター)
15班	木村紀夫さん(大熊町・大熊未来塾)
16班	田中秀昭さん (東京土木支店 東電福島遮水壁工事事務所所長)
17班	青木裕介さん(広野町、ぷらっとあっと)
18班	佐藤亜紀さん(大熊町)
19班	青木淑子さん(富岡町・3.11を語る会)
20班	柴口正武さん(元広野中学校教員)

7~10 演劇創作WS

講師陣と共に、生徒の状況を見ながら授業を組み立てた。取材内容を基に少しずつイメージを形にしていく工程を丁寧に行った。演劇創作においては、脚本を書かずグループで話し合いながらその場でシーンを創りあげた。書かれた言葉に頼らず、その場で生まれる表現を大切に、全員で合意形成を図りながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。

中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足りないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- ① 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- ② 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ていないか。きちんと相手の背景も描けているか。
- ③ 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのが劇を見て分かるようになっているか。

中間発表会でのアドバイスを受けて、多くの班が作品

をガラッと変えた。その軽やかさもまた、演劇を中学3年間実施してきた生徒たちがいる学年ならではの变化だと思われる。

1.1 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。20班 20 作品を4グループに分け、休憩を挟みながら終日かけて演劇鑑賞を行った。生徒はそれぞれの発表に対してワークシートにコメントを記入した。感想シートは後日誰でも見るできるように共有した。

FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞を用意し、表彰も行った。

	班	タイトル	FW先
A	8	まだ消えていない風評被害と偏見	檜葉町
	4	仕事とホンネ	東京電力
	13	ぷらっとあつと～双葉郡のルール～	広野町
	16	原発	大熊町
	17	ぷらっとあつと完成までの道のり	広野町
B	1	良空の軌跡～前向きにふるさとの「今」を伝える～	大熊町
	2	3. 11 松本物語	双葉町
	14	アルプス処理水	檜葉町
	15	木村さんの話	大熊町
	19	伝えつづける	富岡町
C	11	避難所	富岡町
	9	道の駅「なみえ」	浪江町
	5	三角フレームの学び舎	大熊町
	12	復興のために	葛尾村
	7	富岡は負けん!	富岡町
D	10	私の理想と現実	大熊町
	6	電柱は全て見ていた	檜葉町
	3	カフェができるまで	川内村
	18	大熊町と人々の想い	大熊町
	20	今できることを!	広野町

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージや制服姿で演じたが、それでも情景が伝わったのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使用して防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。

また、演じる役の心情を丁寧に理解しようとし、震災当時の混乱や、その後の立場の違いによるそれぞれの葛藤などをとても丁寧に描いている班が多かった。生徒たちの創作に丁寧に向き合ってくださった講師の方々の方は大きい。演劇を通して、全てにおいて単純な悪者などはおらず、あくまで各々がそれぞれの立場で物事を見て誰かを想って動いて、それが噛み合ったりすれ違ったりするために対立が起きてしまうのだということを学ぶことができた。

今年度も、取材にご協力いただいた多くの方が発表会を観にきてくださり、丁寧なフィードバックをいただいた。さらに客席では生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が

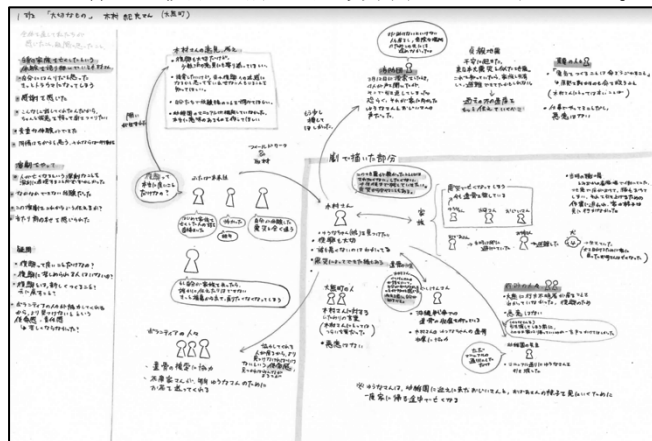
生まれる場面もあった。

「境界を超える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされるとき、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのを感じた。ギャラリーも埋まるくらいたくさんの観客に見守られながら、無事に発表会を終えることができた。この時間を生徒と教員、地域の方々と共にできたことを嬉しく思う。



1.3 演劇振り返り、リッチピクチャー作成

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を振り返り、個人として・チームとして自分達がどのように成長したのかを言語化し、お互いの成長を讃え合った。その後、「リッチピクチャー」の手法を用いて自分たちが作った演劇を構造的に分析するWSを行なった。



(昨年度のリッチピクチャーの例)

リッチピクチャーとは、ある人とそれを取り巻く様々な人・モノ・コトと関係性を表現した図のことである。書き方はおおむね次の通りである。

- ① 中心となる人を書く
- ② その人に関係する人・モノ・コトを手当たり次第書く
- ④ 場合によってはそれらを並べ直し、グループ化する
- ④ 線でつなぎ、それを矢印にする
- ⑤ 線や矢印に吹き出し等で、その矢印に関わる感情などを書いていく更に、より内容を整理するために、演劇では描ききれなかった部分の情報を補足させた。残念ながら

ら十分な時間が取れず、リッチピクチャーを全ての班が完成させることはできなかった。しかし、完成させることができた班は自分たちの演劇を構造化することができた。

14・15 哲学対話

今年度、演劇プログラムの中に哲学対話を初めて導入した。演劇の発表会が終わり、夏休みを経てちょうど1ヶ月経ったところで、哲学対話を通して演劇プログラム全体のリフレクションを行った。

最優秀賞を取った班に、ファシリテーターが質問をする形で行った。「結局、演じるとは何だったのか？」を問いとして、取材という問う行為から「聞きたいことは聞けたのか？」「聞けなかったとしたら、なぜ？」「何については踏み込めなかったか？」についてそれぞれじっくり考えた。

演劇プログラムの1つ1つに取り組む中で、慌ただしく過ぎてしまっていた「なぜ？」という問いを、過ぎた後にもう一度取り出し、丁寧に扱い、皆でじっくり考える時間となった。



(6) 振り返りと評価

演劇や哲学対話を中学校で経験している中高一貫生がいることで、年々創作までのスピードが速くなってきている。自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話を楽しみながら腑に落ちるまで考え続けることができる生徒がそれぞれの班に存在していたことで、あらゆる作業がスムーズに進んだ。実際に、どの班も必要最低限の衝突はあったが、どの班も逃げずに向き合い、誰一人取り残さない姿勢が見られた。何より生徒達が協働作業を楽しんでいた。

また、「地域課題を演劇にする」という一見固くなりがちなテーマにも、演劇の良さである「フィクション」を軽やかに取り入れていた。例えば、漁協を取材した班は、取材対象の人を主役にするのではなく、漁協に聳え立つ電柱を主人公にして、「電柱は全て見ていた」というタイトルで震災当時の様子を描いた。携帯電話のライトを上手く使い、暗い中家族の安否を心配しながら車を走らせる取材相手の方を照らしていた。無機質な電柱にも感情があるかのような高度な演出をした。また、椅子やテーブルを上手く使ってあらゆるものを表現していた。

演劇は、舞台上立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通し

て、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は今後の未来創造探究でも活かされるだろう。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考のトレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作ること自体が論理的に情報を出していないと相手に伝わらない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オリザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するのではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要である。取材をすると、どうしても取材対象に共感してしまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起こるが、そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深掘りしてもらいたい。

(7) 次年度実施への課題

振り返りでも述べたように、意見の違いを越えて協働し合える集団づくりは成功したと言える。しかし、同時に課題に感じたのは、一貫生と高入生のインプットの知識量の差である。一貫生は既に中学で3年間地域について学んでおり、高校生になって初めて地域について学ぶ高入生と共に班を作って地域課題と向き合うとなると、そこにある知識の温度差を埋めることに時間がかかっているように感じた。一貫生だけの演劇班を作り、より踏み込んだ作品を作るということにも挑戦してみたい。それが、高入生にとっても質の高い学びとなるはずだ。また、地域を新鮮な気持ちで捉えた高入生が作る作品からも、学ぶものがあるはずだ。

これからの世の中エンパシーの力が重要だとある。エンパシーとは「他者の感情や経験などを理解する能力」のことであり、それを「他者の靴を履くことができる能力」として表現している。生徒たちがこの授業を通してなるべく多くの地域の方々と出会い、顔が見える人たちを増やしていくことが、彼らのエンパシーを育てる唯一の方法であると改めて考えた。また、地域の大人たちが考えていることを想像・理解することや、他者の感情を自分も感じるといったエンパシーで完結せず、それが何らかのアクション（未来創造探究）を引き起こすにはどうすればよいかについても考えたい。

演劇を通して他者の人生に触れるだけでなく、その先へ行くにはどうすれば良いのか。演劇と探究をシームレスにつなげられるような仕掛けを、次年度に向けてさらに考えて更新していきたい。



3. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサブリの活用を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～

イラク支援ボランティア、エイドワーカーとして取り組んでいる高遠菜穂子氏に講話いただいた。高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を世界の課題と繋げて考え、世界平和や国際理解の意義を考えることを目的としている。

- ① 日時 令和6年1月23日 (火) 6、7校時
- ② 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとお なほこ) 氏
- ③ 対象 本校1年次生徒、教職員

(2) 実施内容

演題『戦争の与える影響～人々の体と心に残る傷 (トラウマ) ～』内容を一部抜粋する。

【世界と日本の難民問題】

難民 UNHCR グローバル・トレンドズ 2022 によると、紛争、迫害、暴力により家を追われた人が過去最多 1 億 840 万人 (2011 年は 8930 万人) である。国境を越えたら難民 (現在 3530 万人)、越えないのが国内避難民 (現在 6250 万人)。難民出身国はシリア (650 万人)、ウクライナ (570 万人)、アフガニスタン (570 万人) で、全体の 52% が 3 カ国からの避難者である。また、難民最多受入国のトルコ、イラン、コロンビア、ドイツ、パキстанは 2～300 万人近く受け入れているのに対し、日本の難民認定が毎年 50 人以下に止まっている。非常に悲しいことに日本の入国管理局による外国人に対する人権侵害は深刻であり、死者も出ている。ウィシュマさん (スリランカ) の事件で大きく報道された。クルド人問題もある。このような人権侵害が日本という平和な国で起きていることを皆さんにはもっと知ってほしい。



【市民のトラウマのほかに、兵士のトラウマも深刻】

戦争によって市民が受けるトラウマ (身体的外傷、心的外傷 PTSD) について、目を背けたくなるような写真や映像と共に説明を受けた。医療施設への攻撃や、捕虜・容疑者の扱い、スクリーニング (身元確認) での拷問や処刑は、交戦規定、国際人道法、ジュネーブ条約などの違反であり、戦争犯罪になるが、戦場ではモラルが完全に低下している。

市民だけでなく兵士のトラウマも大きな問題になっている。PTSD (心的外傷後ストレス障害) により、帰還米兵の自殺はイラクでの戦死者より多いという。「兵士のト

ラウマは、軍の名誉とされる行為が良心と折り合いがつかないことで生じてくるのだ。」という言葉が強く心に残った。日本でも帰還兵のトラウマケアについての研究がすでに始まっているようだ。つまり、自衛官の海外派遣における新たな任務は、戦闘を想定せざるをえない内容となってきているという。これも大きな問題である。

【PEACE CELL PROJECT について】

高遠さんは 2022 年に、日本とイラクの仲間たちと平和教育とエコロジーに特化した一般社団法人 PEACE CELL PROJECT を立ち上げた。絵本の読み聞かせによる情操教育と、演劇を通して彼らの想像力を刺激し、紛争解決できる人を増やしていくのが目的である。現在では NGO 団体やドホークの学校でワークショップ (WS) を行っている。

今でもイラクでは民族間の分断が根強く残っている。そして今大きな問題となっているのが、IS ファミリーと子供兵の社会復帰だそうだ。人々の中に IS に対する強い恐怖心と憎悪があり、社会復帰が著しく難しいという。

「IS の子どもは受け入れられない」と「子どもに罪はない」で社会は揺れている。再教育、リハビリを終えた元戦闘員や元子ども兵をコミュニティが受け入れるかどうかは課題である。現在はコミュニケーション WS が中心だが、最終的には本校と同じように演劇を通して彼らのエンパシーを高めたいと高遠さんは話していた。(エンパシー: 他者の感情や経験などを理解する能力のこと)

※講演後は、本校の演劇作品を鑑賞し、生徒たちに熱心に質問をしていた。



(3) まとめと今後の展望

「気づくとは、傷つくことだ」とは歌人・柘野浩一の短歌である。子供扱いせず、紛争地の現状をありのままに伝えてくれた高遠さんに感謝したい。生徒達は、その熱量に圧倒されながらも自分達の知識を広げようと真剣にその思いを受け止めた。辛い現実涙を流しながら、しっかりと前を見てメモを取り続ける生徒もいた。講演会後の質疑応答は 2 時間以上に及んだ。例年、本校で自衛官を目指す生徒の中には、復興支援で被災地に来ていた自衛隊に助けられ、憧れを抱いた者が多い。今年も自衛官を目指す生徒が遅くまで高遠さんに質問をしていた。全ての生徒にとってまた、イラク復興と双葉郡の復興を重ねた生徒も多く、探究のテーマに直接繋がった生徒もいたようである。多いに刺激を受けた講演となった。

3. 1. 4 探究との接続・キャリア教育

1年次の「地域創造と人間生活」の授業は、9月から地域の問題の解決に向けた実践プロジェクト創出を目指す「未来創造探究」に切り替わる。ゼミの所属は2年次からとなるが、以下のような段階を経て生徒は自らの興味関心に問いを見つけ、探究活動を行った。

(1) はじめに

8月までの「地域創造と人間生活」の授業では先述の通り演劇や双葉郡ツアーなどを行った。生徒はそれを振り返りながら9月からの探究をスタートさせる。

(2) 実施内容

①プチ探究

6月27日と7月10日には「自分の「気になるもの」を決めて」「何かしらアクションをして」「結果を振り返り提出する」プチ探究を行った。生徒にはたとえ仮説がうまくいかずともそれは失敗ではなく検証の過程のひとつに過ぎず、構造として失敗が存在しないことを伝えた。テーマアプローチとして、やりたい・なりたいことを実現するコース、困りごとを解決するコース、気になることを深掘りするコースを示した。

後日、行動力、創造性、探究的な学び・調査で評価し、表彰を行った。

②自己理解ワークショップ

探究テーマを創出する方法として、自己の興味関心を広げ、社会課題とつなげるアプローチがある。9月19日のワークショップでは、興味関心を言語化するために、自分の「やってみたい」ことを100個目標に書き出す「Will リスト100」を行った。

③探究オリエンテーション

10月3日の探究オリエンテーションでは「未来創造探究はどんな学習活動でどのように取り組むのか？」の学習を行った。インプットが多くなるので3項目に分けジグソー法で取り組ませた。分担項目は以下の通りである。

- ・中学の総合的な学習の時間との違い
- ・探究的な学びとは何か
- ・なぜふたば未来学園は探究を大事にしているのか。地域・社会を通して学ぶとはどういう意味か
- ・探究を行うにあたっての先輩からのアドバイス

④マイキーワード探し

10月10日と17日はテーマへのアプローチとしてマイ

ンドマップとマンダラートを用いて、自己の興味関心について深掘りをした。前時に学習した「探究的な学びとは、自分で答えを創る学び」を確認した上でマインドマップに取り組む。その後、特に関心のあるもの＝「マイキーワード」でマンダラートを作った。マイキーワード×学問、マイキーワード×具体化と手掛かりに深掘りをした。

⑤ヒューマンライブラリー

10月31日は地域で活動する方々のプロジェクトについて話を聞いたうえで、自分自身の探究テーマを深めていくヒューマンライブラリーを行った。生徒は異なるゲストの話を2回聞き、それを踏まえ教員との座談会を行った。ゲストは以下の通り。鈴木恵さん（紙芝居震災語り部）、中井 俊郎さん（日本原子力研究開発機構）、小松理度さん（へキレキ舎 代表）、江尻 浩二郎さん（東日本国際大 専任教員）、高橋大就さん（東の食の会 専務理事）、平澤俊輔さん（いわき FC スタッフ）、横須賀直生さん（おかしなお菓子屋さん Liebe 代表）、猪狩僚さん（いわき市役所職員）、小林奨さん（YONOMORI DENIM）。

⑥しくじり先生

11月28日に生徒が教員の失敗や挫折の話を聞くことで、チャレンジする目標を自分で持てるようになること、批判せずに相手の言葉を受け止められるようになること、自己表現の方法を学ぶこと、受け身から脱却することなどの効果を期待し実施した。

⑦探究クラスに分かれて各自活動

11月以降は基本的に各自の活動となるため、以下のような段階を提示した。

- ①課題設定ワークシートを用い、現状と理想の状態（あるべき未来・ありたい未来）とのギャップを浮かび上げさせ、それを埋めるための「問い」や「仮説」を立てる。
- ②調査のためのアクションを実施し、探究の「テーマ（＝問い）」を固める。
- ③振り返り、新たなアプローチや問いを立てる。

3. 2 未来創造探究（高校2年次）

3. 2. 1 未来創造探究2年の概要

2年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校の「未来創造探究」の授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力災害・伝承探究ゼミ」、「共生社会探究ゼミ」、「地域社会・経済探究ゼミ」、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」、「自然科学・地球環境探究ゼミ」、「スポーツ医・科学探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う（※新課程カリキュラムに伴い、開校以来設定していたゼミ編成を改編）。

（1）はじめに

本年度は、新課程カリキュラム編成に伴い新しくゼミが改編された。

＜原子力災害・伝承探究ゼミ＞

原子力災害からの復興や廃炉など福島固有の問題を軸にしながらか地域社会の在り方を探究する。

科学技術による発展と不確実なリスクへの対応や、廃炉の進め方、廃炉推進の際の合意形成のあり方、偏見や風評、原子力災害等の厄災からの教訓の後世・世界への発信と伝承などの課題を設定し、トランス・サイエンスの時代における課題の解決に向けて探究と実践を行う。

＜共生社会探究ゼミ＞

地域に暮らす人と人の関係性や、ウェルネス（健康・福祉・医療にとどまらない社会的環境の豊かさ）について探究する。

対立や分断を超えて多様性を認め合う包摂的な共生社会の実現や、市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立（自助・共助・公助）、スポーツによる健康増進や豊かなコミュニティの実現などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

＜地域社会・経済探究ゼミ＞

避難や少子高齢化等により断絶してしまった地域コミュニティの再構築について、生業や農商工業などの産業振興や社会システム（仕組み）の観点から探究する。

地域の農水水産資源を活用した6次産業化等による新たな価値の創造や、イノベーションによる新たな産業の創出、循環型の地域・経済システムの実現などについて課題を設定し、その解決に向けて探究と実践を行う。

＜人間科学・文化・芸術探究ゼミ＞

人間の心理・行動の分析や、人間が生み出す芸術・アートを生かした社会のあり方について探究する。

差別・偏見のメカニズムの解明や、芸術・アートを生かしたウェルビーイングを追求するコミュニティの実現、地域の文化財や伝統芸能などによる地域のアイデンティティの確立などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

＜自然科学・地球環境探究ゼミ＞

自然現象の真理や、人間と自然環境との関係性を探究する。

自然科学の究明による人間社会と調和した環境の実現や、汚染からの環境回復、気候変動、再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する地域特性を活かした循環型のエネルギー・社会の実現、望ましい人間社会と地球環境の関係性などの課題を設定し、持続可能なエコシステム構築に向けて探究と実践を行う。

＜スポーツ医・科学探究ゼミ＞

スポーツ医・科学に基づいたハイパフォーマンスの実現について探究する。

スポーツ医・科学にもとづく意図的なトレーニングやトップアスリートとすそ野の好循環による育成環境の実現、部活動などの育成年代の社会環境の課題などについて、スポーツバイオメカニクス、生理学、栄養学、医学、心理学などの視点から課題解決に向けて探究と実践を行う。

これらの新しいゼミは福島の抱える真正（Authentic）な課題と世界の課題を重ねた未来創造型の探究と実践を通して、新たな社会を考えるために改編された。

新課程カリキュラムの編成に伴い、未来創造探究は高校1年次の10月から始まることとなった。従来の高校2年次4月から前倒しになったため、より探究が進んだ状態での、高校2年次の探究開始となった。

（2）実施内容

＜4月 ゼミ配属のための面談＞

ゼミ	6月時（人数）	7月時（人数）	計
原子力災害・伝承	8	9	17
共生社会	30	34	64
地域社会・経済産業	15	13	28
人間科学・文化・芸術	43	42	85
自然科学・地球環境	17	16	33
スポーツ医・科学	17	16	33

自分のプロジェクトと合うゼミを選択するため、ゼミ担当教員との面談を行う。

＜5月 ゼミ配属決定、ゼミ活動＞

＜6月 情報検索講座、ゼミ活動＞

情報検索 (Level 1) : 動画系

- **STEAMライブラリ**
関連するテーマについて動画のレクチャーを見ることが出来る。<https://www.steam.library.gyrf.ac.jp/>
- **夢ナビ**
関連するテーマについて、大学の先生が書いた解説を読むことが出来る。<https://yamanaka.info/>
- **JMOOC (ジェイ・ムーク)**
無料で学べる日本最大のオンライン大学講座。<http://www.jmooc.ac/>

情報検索 (Level 2) : 新書・新聞記事系

- **新書マップ**
関連するキーワードで探したり、テーマ別に絞りこむことが出来る。<https://shinsho.maps.gyrf.ac.jp/>
- **朝日けんさくくん (朝日新聞の検索)**
1987年以降の朝日新聞中、系列雑誌の記事などを絞りこむことが出来る。<https://kyushu.asahi.com/hagry/>
- **ヨミダスforスクール**
1988年以降の読売新聞の全国版・地域版の記事を絞りこむことが出来る。<https://yomidasschool.com/school/>
- **リサーチ・ナビ**
国立国会図書館の調べ方案内、便利なデータベースの紹介、ウェブサイトの案内など。<https://search.nac.go.jp/online.html>

情報検索 (Level 3) : 論文系

- **Google Scholar**
<https://scholar.google.co.jp/>
- **J-STAGE**
<https://www.jstage.jst.go.jp/article/gyrf/0000/0000/0000/0000/>
- **Cinii Articles**
<https://ci.nii.ac.jp/>

例年、文献調査・先行研究が弱いという反省を受け、学校司書との協働で、新書・新聞記事・書籍・論文等の情報検索方法のワークショップを行った。

<7月 ゼミ内報告会、ゼミ活動>

これまでの活動をまとめつつ他の生徒の活動から気づきを得られるよう、ゼミ内でミニ報告会を開催した。

<8月 ゼミ活動>

<9月 ゼミ活動、小論文講座>

		9/22	使用教室	10/27	使用教室	
1	塩田	『下流志向』	92-4教室	10/27	32-4教室	
2	小宅	『ほんとうの環境問題』	13	選択12	5	選択12
3	渡部ゆ	『「家族」難民』	92-2教室	0	講座なし	
4	草野	『海洋プラスチックごみ問題の真実』	7	選択9	7	選択9
5	蒲生	『できることをしよう。ぼくらが震災後に考えたこと』	7	選択10	3	選択10
6	鈴木敬	『未来の年表』	6	選択11	0	講座なし
7	高野	『友だち 地獄』	19	選択1	13	選択1
8	柳川	『哲学の使い方』	62-3教室	82-3教室		
9	大谷	『認知症と長寿社会 笑いのままで』	4	ALS2	7	ALS 2
10	佐藤貴	『異常気象と人類の選択』	32-5教室	0	講座なし	
11	駒木根	『生物はなぜ死ぬのか』	15	理科実験室 1	10	理科実験室 2
12	阿部	『「つなみ」の子どもたち 作文に書かれなかった物語』	5	選択7	3	選択7
13	四家	『スマホ編』	162-1教室	192-1教室		
14	杉	『18歳からの格差論』	7	選択8	4	選択8
15	成田	『この世でいちばん大事な「カネ」の話』	講座なし	26	2-2教室	
16	佐藤和	『教育という病』	講座なし	72-5教室		
17	遠藤太	『給食の歴史』	講座なし	11	選択11	

大学入試等の小論文試験で頻出のテーマ・トピックに関する新書の要約版(学研小論文ブックレポート)を担当教員が選び、グループ学習を取り入れながら、議論しながら生徒と理解を深めていく。

<10月 中間発表会、ゼミ活動>

高校3年次生徒の発表を視聴、時には質問しながら、探究的思考を高めた。特に今年度は「対話交流部門」が新設され、発表者および視聴者や視聴者同士がフラットに議論し、理解をより深める部門への参加者も多かった。

<11月 専門知講義、ゼミ活動>

ゼミ編成の改編の目的が、探究内容の深化および専門性の獲得であったことを受け、大学の先生を外部講師としてお呼びし、生徒の探究のヒントとなるよう、全体講義と個別相談を行った。10月には、福島大学 川崎興太教授(主に、共生社会ゼミの生徒対象)、11月には、筑波大学大学院 西嶋尚彦 名誉教授(主に、スポーツ医ゼミ

の生徒対象)に全体講義および個別相談をお願いした。

<12月 専門知講義、ゼミ活動>

<1月 専門知講義、ゼミ活動>

自然科学ゼミの生徒を対象に、福島大学 佐藤理夫教授より「研究の作法講座」という題で、研究を進める上で大事な事(例:テーマ設定/仮説設定/検証/考察のサイクル、ゴールや目標タイム設定等)について講義をして頂いた。

<2月 セルフエッセイ、ゼミ活動>

Part	項目	詳細
1	自身の体験・エピソード	・学習の動機 ・ふたば未来学園入学の動機 ・震災等の体験
2	探究テーマ(問い)と「地域・社会のあるべき姿」	・調査した地域、社会の実態 ・地域、社会のあるべき姿 ・実態とあるべき姿のギャップ
3	探究テーマの検証・課題解決のアクションと考察	
4	探究を通して得た自身の学びと創りたい社会	・自分自身の成長、変化 ・創りたい地域、社会 ・地域、社会に対して、自分はどうか関わっていくか(生き方・在り方)

本校独自の様式で、探究に取り組む背景となった体験・エピソード(Part 1)・探究テーマ(問い)と地域・社会のあるべき姿(Part 2)、探究テーマの検証・課題解決のアクションと考察(Part 3)、探究を通して得た自身の学びと創りたい社会(Part 4)に分かれ、探究や自分の将来について理解を深めるエッセイを、今回はPart 1とPart 4のみを記述する。

(3) 成果

新しくゼミが編成されたことで、目指すべき抽象的な概念がより具体的かつ幅広く設定され、生徒の活動・プロジェクトに幅を利かせることができた。また、大学の先生などが行う専門知講義によって、生徒の活動・プロジェクトの深化をある程度促すことができた。特に、スポーツ医探究ゼミにおいて、アスリート等の育成に関わる先生の助言を継続的に得ることができ、トレーニングに統計的・客観的なデータを用いる手段を少しずつ学ぶことができた。

(4) 課題と展望

前述の通り高校1年次の10月から探究が始まり前倒しになったことは、生徒の進路計画にとっては良いことではあるが、教員側にとっては、2年次4月の段階でかなり高度な内容を扱わなければならない、教員側の指導体制(月次会のあり方)やゼミ担当者間のコミュニケーションについて改善の余地がある。

3. 2. 2 原子力防災伝承探究ゼミ

本ゼミは旧原子力防災探究ゼミの流れを汲んだ新カリキュラムのゼミである。

分断・対立を超え、多様性を認めあう包摂的な共生社会の実現、市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立、賠償・ケアによる被害者支援、地域資源の活用による新たな価値の創造、イノベーションによる新たな地域産業の創出、廃炉事業の推進におけるゴール設定、エンドステート、技術開発、合意形成の課題、科学技術による社会の発展と不確実なリスクへの対応など、多岐にわたる問いを通して、トランス・サイエンス（科学と人間社会の関係性）や厄災の記憶と伝承といった概念の獲得を目指して作られたゼミである。伝承活動に関するプロジェクトを実践したい生徒が多く所属し、多様なジャンルの実践につながりそうなところまで進捗した。

(1) はじめに

このゼミの設立当初、第一希望で提出してきた生徒数は4名である。そこから面談を重ね、20名程度の人数まで希望者が増えた。人間科学と共生社会のゼミで取り扱う内容との差異がわからず、トランスサイエンスの概念と、人数が少なければ担当者と十分な対話をしたうえで活動ができると考えた生徒で所属者数が増えた。

そのため、単なる文系の探究活動に終始させず、科学的なものの考え方を意識させ、授業の時間は基本的に対話形式で進めることとした。また、進捗の報告会も、対話形式で進めることを勧め、生徒が自分たちで動く雰囲気づくりにつながった。

(2) 実施内容

ゼミメンバーを対象として実践をした内容でも、必ず他のゼミに声をかけ、共鳴した生徒にも参加させることにした。

①学び舎ゆめの森訪問

本に関する探究活動をしている生徒、演劇教育についての探究活動をしている生徒を連れて、双葉郡大熊町にある、学び舎ゆめの森を2日訪問した。1度目は、演劇の公演会を参観し、2度目は対話・本・演劇・哲学対話を取り扱っている生徒を連れて訪問した。他ゼミから同行した生徒の中には大熊町出身の生徒も含まれていた。小さい頃の資料の展示を見て喜ぶ彼女の姿に、原子力防災伝承ゼミのメンバーも、伝承にかける思いを新たにされた様子であった。

②新潟大学附属新潟中学校の招待

1月31日(火)の授業時間中に、新潟大学附属新潟中との交流会を行った。中学1年生の地域探究活動の助言が欲しいと、ホープツーリズムで来県され、120名の生徒が双葉郡でフィールドワークの後、来校した。

本校からは、原子力防災伝承探究ゼミを中心に、他のゼミからも合わせて20名の展示実践発表とワークショップを行った。参加する中学一年生からの鋭い質問に驚きを隠せない生徒もいたが、失敗をすることも含め、伝承活動やワークショップの運営の難しさを痛感した様子であった。

(3) 成果

基本的には、探究活動の時間を対話の時間と位置づけ、生徒たちの話に耳を傾ける時間にした。授業ははじめの5分~10分を目線合わせの時間とし、それ以外の時間は実践をしたり、作業をしたりする時間とした。カリキュラムの変更後、7時間目の後の放課後には活動時間が多くないことから、ゼミとしての目線合わせに時間をかけず、各自ワークとした。他のゼミからも相談に来る生徒が多くおり、トランスサイエンス的なものの考え方や対話の重要性については、潜在的にも理解している生徒が多い。

対話を取り扱った探究活動では、ゼミで普段取り入れている方法で対話を試しに始めてみる生徒が多く、あちらこちらで車座ができていた。

(4) 課題と展望

書籍に当たることは、引き続き意識的に行っていききたい。データを用いたプレゼンテーションにも、考察に主観が入ったものも多くあった。

また、実践に向けた心理的障壁が低くなるよう、実践時には同じようなテーマの生徒を参加させることも多かったが、そのことによって初対面の相手と対話する際にも自分の知り合いを多く出席させ、いつものメンバーのように対話を始めてしまうことも多かった。新潟中との交流を振り返り、次の実践に向けた態度変容につなげたい。

3. 2. 2 共生社会探究ゼミ

共生社会探究ゼミは、個人の固有の外面の属性（国籍、人種、性、年齢、障がいの有無など）や内面の属性（経歴、価値観など）にかかわらず、互いの多様な違いを尊重し受容し合い、包摂的な共生社会の実現や市民性とアイデンティティの確立によるコミュニティの真の自立（自助・共助・公助）、スポーツによる健康増進や豊かなコミュニティの実現などの課題を設定し、課題解決に向けての探究を行っている。今年度本ゼミに所属しているのは、アカデミック系列15名、スペシャリスト系列9名、トップアスリート系列3名、計27名で、個人あるいはグループで探究しており、全部で22のプロジェクトが進行している。

(1) はじめに

探究の「テーマ」や「やりたいこと」の方向性は決まっているが、「どうしてそのように考えるのか」といったロジックが作れていないため、アクションまでたどり着けない生徒が多かったため、1年次に作成した課題設定ワークシートを見直すことから始め、各プロジェクトの進捗状況に合わせて教職員（教員とカタリバスタッフ）が個別にフォローした。

また、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へと移行し、アクションしやすい環境となったため、積極的に外部と連絡を取り、イベントに参加したり、専門家の話を聞くなどして探究を進めているところである。

(2) 実施内容

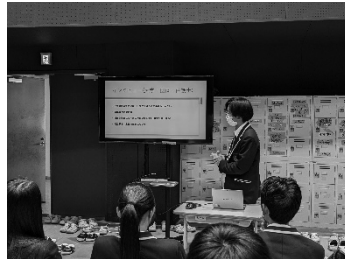
今年度最初の授業で、グループ（生徒4～5名、教職員1名）ごとに春休みに実施したアクションや進捗状況を報告した。アクションまでたどり着けていない生徒が多いため、課題設定ワークシートを再記入させ、それぞれの「問い」をブラッシュアップしていった。

7月11日、ゼミを2つのグループに分け（1グループ11～12プロジェクト）ゼミ内報告会を実施した。報告会後は、友だちと教職員の感想やアドバイスをもとに、自分のアクションを振り返り、夏休み計画シートを活用しながら夏休みの計画を立てた。

10月3日、専門知講義を実施。「地域連携・まちづくり・高校生の社会参画」をテーマに福島大学共生システム理工学類教授 川崎興太先生より講義をしていただいた。講義後、生徒の各探究へのコメントやアドバイスをいただいた。



10月17日、中間発表を実施。外部講師からのコメントや生徒同士の対話から新たな気づきや具体的なアクションへの意欲を高めることができた。



(3) 成果

今年度は新型コロナウイルス感染症が5類感染症へと移行し、アクションしやすい環境となったため、施設を訪れたり、遠方の専門家とオンラインで話を聞くなどして、現状や課題について基礎的な知識を得ることができていた。そこから、今後のアクションの方向性や新たな課題を見つけることができた。

2年次10月時点での生徒のルーブリック自己評価では6月時と比べて、【E：他者との協働力】と【H：寛容さ】の項目において評価が大きく伸びていることから分かるように、テーマは違うが、方向性が同じ生徒同士と一緒にアクションをし、仲間と協力・協働しながら、共通の目標に向かって活動を進めることができている、他者の意見を受け入れたり、思いやりの気持ちを持って、相手の幸せを考えることができていた。

(4) 課題と展望

生徒のルーブリック自己評価において低いのが【D：表現・発信力】【I：能動的市民性】である。今後は、論理的に自分の探究をまとめ、外部の発表機会も積極的に活用するように促していきたい。さらに、「自ら行動する」「アクションする」ことから、他者の意見や考えを聞く機会を増やし、そこから「自分の考え」「自分の意見」を見つけ出し、社会の主体としての意識を持ち、未来を考えることができる力が養われていくように、生徒に寄り添い探究活動を進めていくことが大切であると思う。

3. 2. 2 地域社会・経済探究ゼミ

(1) はじめに

本ゼミは、避難や少子高齢化等により断絶してしまった地域コミュニティの再構築について、生業や農商工業などの産業振興や社会システム（仕組み）の観点から探究を深めることを目的としている。地域の農林水産資源を活用した6次産業化等による新たな価値の創造や、イノベーションによる新たな産業の創出、循環型の地域・経済システムの実現などについて課題を設定し、その解決に向けて探究と実践を行っている。

(2) 実施内容

・大熊いちごプロジェクト

大熊町のいちごを利用したスイーツやパンを開発し、大熊町を盛り上げようと考えた。スーパーのマルトと協力し、商品開発を行って販売するところまでアクションが進んでいる。

・フードロス

家庭で調理の際に出る野菜くずや生産余剰の米や野菜を使い、誰でも簡単においしく調理できる料理を調べた。実際に農家に赴き、余ってしまった野菜や規格外の米をいただき、簡単にできる料理を調査し、試作している。



・スイーツで広野町を盛り上げる

自分の好きな韓国発祥のスイーツ「トュンカロン」を広野町の名物にして広野町を盛り上げようというプロジェクトを考えました。広野町のミカンをとんかろんに取り入れることで、さらに広野町を盛り上げたいという想いで、広野町民と交流会を行い、意見をもらうというプロジェクトを模索している。

・葛尾村のヤギプロジェクト

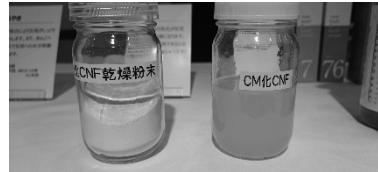


葛尾村にあるヤギと触れ合える施設と協力し、葛尾村の魅力を発信したり、ヤギのミルクを使用したスイーツやせっけんを開発しようと活動している。また、学校でヤギを飼育し、ヤギに親しみを持ってもらおうと考え、葛尾村の施設と協力してプロジェクトを進めている。

・ふたばエシカル

双葉郡の特産品を用いた化粧品を制作するプロジェクトを進めている。基礎化粧品やエシカルの認知度に関するアンケート調査を行い、双葉郡在住の化粧品メーカーの協力を得ながら化粧品制作に向けた活動に取り組んでいる。

・ウッドストロープロジェクト



双葉郡の間伐材を原料とした木製ストローの制作に取り組んでいる。自然由来の接着剤を手に入れるため、大阪で開催された展示会に参加したり、木材加工会社にアポイントを取ったりしながら、環境にも配慮した木製ストローを制作中である。

・磐越東線魅力発信プロジェクト

磐越東線の魅力を多くの人に伝え、利用者を増やそうと考えた。実際に磐越東線フォトコンテストに自ら応募し、それをきっかけに特に小川郷駅の魅力を伝えるアクションを考案中である。

・Novel create

大熊町を盛り上げるための様々なアクションを考えて模索している。リーダーの生徒の活動が大熊町に高く評価され、魅力をより多くの人に発信できるアクションを考案している。



(3) 成果と課題

ここまで半年以上授業が進んでいく中で、自分のアクションのテーマが変わらず、自分の立てた目標に向かって自分で進めている生徒と、テーマがなかなか定まらず、テーマが何回か変わってしまった生徒もいた。また、テーマは変わらないが、アクションの規模を小さくしたりするなど、方向性の微調整が必要な生徒もいた。経済面から地域を盛り上げるためには、外部の専門家の力が必要で、そのアクションをいかに進められたかによって進捗状況が変わっている。実際に大熊町と連携している2つのプロジェクトは、専門家のアドバイスを取り入れることで毎回プロジェクトが前進し、生徒自身もより前向きに取り組んでいる。一方で外部との連携がうまくいかない生徒はプロジェクトが停滞しがちになっている。そのため、まずは外部とつなげることを支援しながら授業を進めている。それぞれの生徒がより自分が立てたゴールに近づけるよう、今後も時には寄り添い、見守りながら少しでもアクションを前進させたい。

3. 2. 2 人間科学・文化・芸術探究ゼミ

R5年度より新たなゼミ編成が行われ、「人間科学・文化・芸術探究ゼミ」ゼミが作られ、主に人間の心理・行動の分析や、人間が生み出す芸術・アートを生かした社会のあり方について探究している。差別・偏見のメカニズムの解明や、芸術・アートを生かしたウェルビーイングを追求するコミュニティの実現、地域の文化財や伝統芸能などによる地域のアイデンティティの確立などの課題を設定し、課題解決に向けて探究と実践を行う。

(1) はじめに

高校8期生は、新課程カリキュラムへの移行初年度ということもあり高校1年次から未来創造探究を進め、例年より進捗が早い(中学校1期生はふたば未来中学校での総合的な学習の授業「未来創造学」において同様の探究学習をしている)。基本的には高校1年次に決めたテーマに沿って生徒が調査・実践を行い、それを教員が個々にフォローする体制が取られた。

(2) 実施内容

①応用倫理学×哲学対話

ふたば未来中学校の授業の一つである哲学対話をさらに発展させ、社会的にやや難しい話題でも気軽に話せる場を作りにはどうしたらいいか？

②10代が暮らしやすい社会へ

中高生を中心に自殺者の数が増えている。中高生の悩みに寄り添い、一人でも多くその悩みを解決するには何ができるか？

③虐待について

近年子どもへの虐待のニュースをよく耳にする。虐待はなぜ起こってしまうのか、虐待を防ぐために自治体や団体はどのような対策をしているのか？

④サステイナブルアートで知る海

近くの海で拾ってきたゴミで、海洋ゴミに関する啓発ができるようなアート作品を制作できないだろうか？

⑤社会問題 on TRGP

シナリオを自ら作れるテーブルトークRPGで、人々が関心を持ちにくい社会問題への関心を高めるには？

⑥学習サポートプロジェクト

最近の高校生の読書時間が短くなっている。高校生が日常的に読書を楽しむようになるにはどうしたらいいか？

⑦わたしたちだってできるもん！

子どもがヘアアレンジメントを自分でできることで、親の家事を軽減をさせつつ、生活の質が向上するのではないか？

⑧保育士が他種と平等な仕事になるために

保育士の待遇があまりよくないというデータがある。

保育士を魅力ある仕事として伝えるには？

⑨復興をめぐる対話の難しさ

震災の復興には対話が必要とよく言われるが、難しい。

⑩原発事故と食

原発事故後大熊町の復興は進んでいるが、原発大国のフランスの高校生は、原発事故とその後の影響、そして復興の状況をどこまで理解しているのか？

⑪自己覚知の重要性

自分自身の事を客観的に分からず、心理的に苦しんでいる人たちを救うにはどうしたらいいのか？

⑫個人と共同体について

自己承認欲求が強すぎる若者が増えている。自己承認欲求に依存しない生き方をするには？

⑬復興の需要と供給

震災後の双葉郡の復興において行政と住民の間には温度差がある。住民の意見が復興の行政に反映されるにはどのような仕組みが必要か？

⑭Full of Fun! Liveの可能性

双葉郡には都市部にあるようなライブハウスがない。ライブを行って広野町でも楽しめるようにするには？

⑮音楽とスポーツの関係性

音楽療法など、スポーツ選手がハイパフォーマンスを発揮するための音楽には、どのようなものがあるのか？

⑯音楽の人に与える影響

人の目覚めがよい目覚ましの音とはどのようなものか？

⑰演劇を通じた地域活性化

演劇を通じて双葉郡を活性化させるには？

(3) 成果

一人一人に対してきめ細かい指導をすることができた。

(4) 課題と展望

時間割と校務の関係で教員間の情報共有があまりできていないので、MTGやその他の方法により生徒の進捗状況を確認できるよう、情報共有の在り方を改善し、生徒の探究活動が活性化するのに資するものにしていきたい。

3. 2. 2 自然科学・地球環境探究ゼミ

本ゼミでは自然現象の真理や人間と自然環境との関係性を探究する理系分野に特化したゼミである。本ゼミ生は、自然科学の究明による人間社会と調和した環境の実現、汚染からの環境回復、気候変動、再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する地域特性を活かした循環型社会の実現、望ましい人間社会と地球環境の関係性などに各自課題を設定し、探究と実践を行っている。

(1) はじめに

今年度のゼミの再編で新たに創設されたゼミである。自然科学系の内容に特化し、計画・実行・結果確認・考察のサイクルを回す中で課題を解決していくという、既存のゼミとは異なるアプローチで探究を進めている。

(2) 実施内容

インターネットや図書館を利用した調査をしたり、フィールド調査や有識者への訪問活動等の実践活動を行ったりして、探究を進めている。

教員3名、カタリバスタッフ1名の人員で生徒18名の探究の進捗状況を把握し、活動をサポートしている。

(生徒の研究テーマ例)

- ・ 土壌の調査 ・ カメムシの匂いで香水作ってみた
- ・ おなかのすいたからザリガニ食べたい
- ・ 捨て犬捨て猫ゼロへ!
- ・ 意識啓発のためにできること
- ・ 海洋汚染

ゼミ活動の様子



(3) 成果

- 各種コンテスト等での入賞
- サイエンスキャッスル 2023 関東大会 ポスター発表部門 優秀賞
 - ・ 紺野 一剣「五社山おろしの研究」
 - ・ 齋藤 佑磨, 古山 寿智「ホタル保護のためのカワナナの生態調査Ⅰ」
- 令和5年度中学生・高校生の科学・技術研究論文「野口英世賞」 入選
 - ・ 齋藤 佑磨, 古山 寿智「ホタル保護のためのカワナナの生態調査Ⅰ」
- 各種発表会への参加
- START 2023 参加 ・ 星野 寿々花, 山崎 こはる
- 2023 国際高校生放射線防護ワークショップ 発表会 参加
 - ・ 星野 寿々花, 山崎 こはる

○第8回福島イノベーション・コースト構想シンポジウム ふたば未来学園高等学校 代表生徒発表

・ 林佳瑞「双葉郡の水生昆虫と環境保全」

○MY PROJECT AWARD 2023 エントリー

・ 四家 遥, 猪狩 颯「微生物発電」

・ 伊藤 珠弓「意識啓発のためにできること」

・ 星野 寿々花, 山崎 こはる「除去土壌から見える大熊町の復興」

● 専門知講義の実施

○福島大学 佐藤理夫教授 講義「実りある探究活動のために」, 探究個別相談会 実施

(4) 課題と展望

本ゼミでは、1年間を通してコンテストや各種発表会への参加を促した。専門家の助言を受けることで、各自の探究の内容を整理し、その後の活動に活かすことができた。

生徒は、興味関心がある物事を探究のテーマにしていることもあり、意欲的に取り組んでいる。これまで、生徒それぞれが課題解決に向けてアクションを実施してきたが、現在取り組んでいる課題を解決するためには先行研究等の膨大な知識量が必要であり、生徒個人だけで進めていくことは難しい。よって、教員が生徒の伴走をしつつゼミ運営を行っているところである。課題としては以下のことがあげられる。

- ・ 先行研究(根拠)に基づいて、論理的な仮説を立てることが難しい。
- ・ 検証を行う上での条件設定、検証方法や解決アクションを模索することが難しい。
- ・ 仮説設定から考察や新たに問いを設定しなおす段階において、探究が高度化するにつれて、多くの支援が必要となる。

これらを踏まえ、今後の展望としては、ゼミとしての基盤を盤石にし、先輩の研究テーマを先輩が引き継ぐほか、研究機関などとも連携するなどしてより高度な研究を進めることが望まれる。

3. 2. 2 スポーツ医・科学探究ゼミ

スポーツを通して、「する」だけでなく「みる」「支える」「知る」という4つの観点を軸に、改めて自分が関わっている競技や各種スポーツについて理解を深めることをしている。その上で、競技力向上や、この双葉郡あるいは福島県にスポーツの力で地域を活性化させるためには何が必要なのかを深めていく探究を行った。

(1) はじめに

スポーツ医・科学に基づいたハイパフォーマンスの実現について探究する。

スポーツ医・科学に基づく意図的なトレーニングや、トップアスリートとすそ野の好循環による育成環境の実現、部活動などの育成年代の社会環境の課題などについて、スポーツバイオメカニクス、生理学、栄養学、医学、心理学などの視点から課題解決に向けて探究と実践を行う。

(2) 実施内容

生徒たちは、以下に挙げる3つのテーマのいずれかに関わる調査・アクションを進めた。

- ①競技力向上
- ②コンディションの調整やヘルスケア
- ③普及活動、地域振興

また、2年次のゼミテーマが変更になり、1年次の後期から進めてきた探究活動を、担当教員との面談等を通して内容やゴールの再確認をした。更には、活動状況を随時確認しながらアクションが思うように進まない時にも生徒主体のを維持しつつも支援をした。

①競技力向上

ジャンプ力やスピード、フィジカルの向上に向けての効率よいトレーニング方法の立案をし、その成果の検証を進めてきた。

運動能力の向上のほかにも、キック精度の向上を目指す活動もした。



②コンディショニング調整

アンケートや専門家へのインタビューを行ったり、実際に調理をしたり検証を実践したりを通して、アスリートのコンディ



ション調整や体づくりにふさわしい睡眠や食事は何かを求めて活動した。

③普及活動、地域振興

子どもたちが運動を好きになるためにはどのような環境やイベントを設けるべきなのかをアンケートや実際の指導実践を通して検証を重ねてきた。また、スポーツや本校ならではの競技を通して地域振興をするために地域との連携を築くアクションを進めてきた。



(3) 成果

特に競技力向上を目指すテーマで活動してきた生徒は、アクションを積み重ねてきた結果、課題の克服につながる成果を見出すことができた。そこまで行きつかなくても順調に検証を重ね、変化を表現できたり、異なる視点の課題を発見できたりという状況でもある。また、大学の先生との接続が叶い、生徒たちの悩みも解消されながら活動が進んだ。

中間発表の時期頃からギアが入る生徒が増え、ゼミ活動も活発化させることができた。

(4) 課題と展望

医・科学的な探究をするためのアプローチの仕方や検証方法に苦慮してしまい、アクションが滞ってしまう場面が何回も起きてしまった。探究したい内容についての基礎知識を身につけたり視点の持ち方をイメージしたりする機会が必要だと感じた。

放課後や休日の時間を各競技の活動時間に費やすことがほとんどのアスリート系列の生徒たちに、どのように授業時間外にアクションを活性化させるための声掛けや活動の充実を目指した支援に工夫をしていく必要がある。

3.2.3 進路探究 キャリア学習

(1)はじめに

本校では、毎週金曜日の3時間目に「進路探究」という時間が設定されている。この時間は、生徒たちが自ら取り組んでいる「探究」の内容や興味・関心と、将来の進路を「繋げ、深めていく」ことを目的としている。2年次では生徒の希望進路が多岐にわたるため、大きく大学進学希望者・専門学校進学希望者・就職希望者の3つの講座を設定し、授業を展開していった。4時間目にはLHRが設定されており、2コマ連続の授業とすることもあった。以下は、その1年間の概要である

(2)「進路探究」の概要

	大学進学希望者	専門学校進学希望者	就職希望者
1	<ul style="list-style-type: none"> 進路講演会（外部講師依頼） 大学受験のスケジュール、共通テストの概要について理解する。	<ul style="list-style-type: none"> 進路講演会（外部講師依頼） 大学や専門学校への進学、就職を選択した場合のシミュレーションを行い、進路選択の仕方について理解する。	
2	<ul style="list-style-type: none"> 進路講演会 各教科の学習についてのガイダンスを行い、年間学習計画を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> 自己分析（外部講師依頼） 「ライフプラン」の作成を通して、自分の人生について考え、やるべきことを明確にする。	
3	<ul style="list-style-type: none"> 志望校研究 大学パンフレットやインターネットを使い、志望校決定のための情報収集を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 自己分析（外部講師依頼） グループワークを通して、自分の長所やPRポイントを考え、進路選択に生かす。	
4	<ul style="list-style-type: none"> 進路講演会（外部講師依頼） 進学費用等についての講演を行い、大学生活についてイメージを持つ。	<ul style="list-style-type: none"> 業界研究（外部講師依頼） 専門学校の講師の先生方による各仕事についての説明を聞き、仕事に対するイメージを持つ。	
5	<ul style="list-style-type: none"> 志望校研究 「分析チャート表」に沿って学校を調べ、志望校の絞り込みを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 自分の適正に合った絞り込み これまでの業界研究・自己分析をもとに、自分に合った職業の絞り込みを行う。	
6	<ul style="list-style-type: none"> 志望校の決定 今までの志望校研究や夏季休業中に参加したオープンキャンパスの内容をもとに志望校を決定する。	<ul style="list-style-type: none"> 分野別講演会（外部講師依頼） 専門学校の講師の先生方の話を聞き、専門学校での学習内容を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> 進路講演会（外部講師依頼） 求人票の見方や、昨今の企業動向について理解する。
7	<ul style="list-style-type: none"> OB、OG 講演会 卒業生の大学生活や高校時代の勉強の取り組みについての講演を聞き、意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 志望校研究 「分析チャート表」に従い、専門学校を調べ、絞り込みを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 企業研究 求人票をもとに「分析チャート表」に従い企業を調べ、絞り込みを行う。
8	<ul style="list-style-type: none"> 成績概況の中間振り返り（外部講師依頼） 	<ul style="list-style-type: none"> 専門学校説明会（外部講師依頼） 各専門学校講師の先生方の学校説明を聞き、志望校についての理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> 企業説明会（外部講師依頼） OBOGの社会人との座談会・人事担当者による企業説明会を通して、社会人としての意識を高める。

	模擬試験の成績概況についての講演を聞き、今後の学習計画を立てる。		
9	・状況に合わせた個別指導 共通テスト対策に関する講話。 総合型選抜に関する講話と志願理由書の作成。 進路未定者に対する面談。	・進路講演会（外部講師依頼） 志願理由書の作成について理解するとともに、現段階での志願理由書を作成する。	・進路講演会（外部講師依頼） 履歴書の作成について理解するとともに、現段階での志望動機を作成する。
10	状況に合わせた個別指導 前時の続きを行う。	・志願理由書の作成 前時の講演の内容をもとに、志願理由書を作成する。	・志望動機の作成 前時の講演の内容をもとに、履歴書を作成する。
11	1年間のまとめ		

その他、これとは別にトップアスリート系列生のスポーツでの進学や実業団への就職、競技継続を望む生徒に対しては、セカンドキャリアに関する講演を行った。

大学進学希望者に対する講座では、前半に様々な情報を収集し、志望校を決定することで進学に対し強い目的意識を持つこと、また、後半では、OBOG 講演会や中間振り返りなどにより、自分の立ち位置や勉強法を振り返りモチベーションを高めることを意識して講座を設定した。

また、専門学校進学・就職希望者に対する講座では、自分自身の内面を掘りさげ、自分の性格（長所やアピールポイント）について考える。その後、様々な仕事の概要について理解を深め、自分に合った職業を選択し、学校や就職先を決定していくことを意識して講座を設定した。特にこの講座では進路業者と1年間を通したプランニングを行い、協力し進めて行った。いずれにせよ、どちらの講座でも、生徒が自らたてた目標に向かい自主的に努力する姿勢を養うことを目指した。

(3) 成果と課題

1月末に進路探究の振り返りとして、この講座を受講した2年次生に自由記述のアンケートを実施した。「1年間の講座を受けて、自分が変わったと思う点があれば、教えてください。」という質問に以下のような回答がみられた。「1年生の頃より、『やらなくては！』という意識が生まれた。」「大学入試に持っている有利な検定などを積極的に受けるようになった。」「将来のために『受け身』にならないようになった。」「自分を変えるのは自分だということがわかった。」「空き時間を有効に活用し、真摯に勉強や自分自身に向き合い頑張っていこうと思えた。」こうした記述から、生徒が自らたてた目標に対し、主体的に取り組み努力する姿が想起される。回収したアンケートの7割弱に同様の主旨の回答がみられ、当初設定した目標に対し、ある程度の成果が得られたように思う。一方、「講座に対する改善点や要望があれば、教えてください。」という質問に対しては、「もっと早い時期から行ってほしかった。」「自分が行きたい私立大学の進学に関する話が薄かった。」「進路が決まっていない人には少しやりづらかった。」などの意見があった。上述したように、本校の進路は多岐にわたり多いときには10教室を使い講座を展開することもあったが、生徒の希望進路のすべてをカバーすることは大変難しいことであった。また、その生徒の希望進路を教員全体が把握し情報を共有すること、業務上の時間的な制約から教員間で講座の主旨や目的を共有しながら講座を進めていくことにも難しさを感じた。この点、次年度への課題と考えている。

3.3 未来創造探究（高校3年次）

3.3.1 未来創造探究3年の概要

週3時間の未来創造探究としてのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比較して、最終発表会後の論文作成に力を入れ、論文作成を通じて自分の探究の理解を深めることを重視した。

(1) 3年次の探究活動概要

4月26日 中間発表
5月～9月 各班、グループに分かれて探究活動
9月24日 未来創造探究生徒研究発表会
10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① 中間発表

3年次の探究の進捗状況を確認することも踏まえ、まず4月に中間発表会を行った。今年度は昨年度に倣って発表+聴衆との議論を軸として、今後の探究のヒントを得ることを重視した。聴衆として新2年次を招き、これから取り組む未来創造探究のイメージをつけるとともに、ゼミ選択の参考にもなるようにした（※今年度より下記のゼミ分けとは異なる）。新たに赴任して探究担当となった教員にとっても、発表会を通して生徒の取り組みを理解する助けとなった。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	プロジェクト数 (総生徒数)	担当教員人数
原子力防災	7 (11)	4
メディア・ コミュニケーション	15 (22)	4
再生可能エネルギー	6 (9)	3
アグリ・ビジネス	5 (6)	2
スポーツと健康	13 (30)	4
健康と福祉	9 (14)	3

※また、上記以外にゼミ混合のプロジェクトとして、「メディア+再エネ」が1PJ、「メディア+福祉」が1PJあった。

③ 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。詳しくは「3.3.4 探究活動発展のための発表会等」に記す。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼びびし、各賞を設定した。

今年度は高校 61PJ、中学 14PJ に加え、仙台二華高校の生徒 3PJ を招き、スライドを用いたポスターセッション部門で出場していただいた。発表部門は生徒の様々な探究活動の特色を活かせるように、コンテスト部門と対話交流部門、ポスターセッション部門（ポスター、スライド選択制）の

3部門に分けた。賞のためだけの発表会ではなく、あくまで探究を深めるための発表会という位置づけとしている。

④ 論文作成

発表会終了後は、探究内容を深めるため論文の形でまとめていった。論文の構成は目次・要旨（アブストラクト）・内容（動機・目的・仮説・検証方法・解決アクション・結果）・考察・探究で得た成長・謝辞・参考資料、とした。分量は6,000字～10,000字と設定したが、文字数よりも内容に探究活動の取り組みがしっかり反映されているかどうかを重視した。12月中旬を一次締め切り、ゼミ担当者のフィードバックを経て1月下旬を最終締め切りと定めた。最終的に優秀な論文1つに「未来創造探究大賞」を与える。

(3) 評価と課題

現行のゼミ編成（左表参照）で行われる最後の未来創造探究となり、新2年次からは新しいゼミ編成で運用しているが、ゼミや学年という枠組みを超えて協働するような活動の形も見られた。

例年の課題となっているが、進路活動との兼ね合いで中途半端に終わってしまうケースや、「活動報告」に終始しデータを用いた分析や深い考察に至らないケースが見られた。次年度以降は最終発表会の時期を早めており、前者の問題点は解決されるという考えだが、後者についてもより質の高い探究活動が生まれることを期待する。

3. 3. 2 原子力防災探究ゼミ

本ゼミは、福島原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究することを主な目的として活動している。所属する生徒は、処理水の海洋放出、事故後の避難により分断された地域コミュニティの再生、震災の記録・記憶の伝承等の課題に取り組んでいる。

(1) はじめに

11名（男子6名、女子5名）の生徒が在籍し、昨年度から各自の設定したテーマに沿って、調査や課題解決のためのアクションを起こしてきた。共同して活動を行っている生徒もあり、7プロジェクトが進行している。

(2) 実施内容

2年次に、各自が設定したテーマに基づき、インタビューやアンケート等の実態調査、文献調査等を行ってきた。3年次では、2年次の活動で判明した事実等をもとに、課題解決のための方策を具体的に考え、実践に移してきた。

①「原発処理水の海洋放出について」

原発処理水の海洋放出に反対する人々の意見の背景に着目し、漁業関係者へのインタビューを行った。また、海洋放出実施前後に、福島県産水産物への風評被害の実態等についての調査・考察を行った。

②「フードロスを減らすためには？」

フードロス問題への関心を高めることを目標とし、楢葉町の飲食店でフードロス削減に向けてどのような取り組みをしているかインタビューを行った。



③「埋立地問題を解決するには？」

ゴミの排出量削減を目標に、国道6号線のゴミ拾いを行い、廃棄されていたもののアップサイクルに挑戦した。また、ゴミの種類ごとに、どのようなリサイクル方法が適切なのか調査を行った。

④「広野町の多頭飼育の現状とは」

人と猫がよりよく共生できる社会を目指し、地元である広野町にいる野良猫の生態の観察、野良猫の保護・自宅での飼育、文献での調査等を行った。

⑤「若い世代が将来について考えられるようになるには？」

中学生に政治や社会への関心を持ってもらうことを目標に、自身の出身中学校でワークショップを行う計画を立て、中学校と交渉した。授業案を作成し、模擬授業を複数回行うことで、内容の改善を図った。

⑥「富岡町に写真を通じて何ができるか？」

富岡町役場と交渉したり、自身で現在の富岡町の様子を撮影したりして、震災前・直後・現在の写真を収集し、それらを用いて富岡町のマップを作成した。

⑦「町の活性化のためにはどのような交流が必要なのか？」

自身の出身地である双葉町の新旧住民の交流を深めるため、地域に伝わる「女宝財踊」に着目し、保存会の方々の協力を得て、双葉町内で住民の方々を対象にした踊りの体験イベントを実施した。



(3) 成果

どのプロジェクトにおいても自分たちの問題意識に基づき、課題解決のためのアクションを起こすことができた。当初の予定や想定と異なることが起きても、課題解決の方法を変更する等、柔軟に対応する様子を見ることができた。

(4) 課題と展望

インタビューやワークショップの開催等、人と関わる活動には意欲的に取り組む生徒が多かったが、一方で、文献や官公庁のデータにあたって、自分の考えの裏付けを行ったり、知見を深めたりすることに意識が向いている生徒は少ない。生徒が経験と知識の両輪を意識して、探究活動を進められるようにサポートしていくことが、次年度以降の課題であると考えられる。

3. 3. 2 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題に対し、情報の発信や過去の記録（アーカイブ）といった手法を通して、その解決に向けた活動を行っている。メディア・コミュニケーションという枠を超えたテーマを設定し探究活動に取り組む生徒も多い。

(1) はじめに

2年次からの総合的な探究の時間では自分自身の興味関心と1年次に得た地域課題を結びつけ、より具体的に探究を進めた。タイムリーな話題として処理水放出にはじまる地域課題に関連するものから、自らの経験に基づいたテーマ、さらに教育関連や芸術分野に至るまで多岐にわたる。そのため彼らに寄り添うアドバイザーの関わり方も、個々人の興味関心と地域課題との関連性や、調査の方法、客観的データの活用の仕方、など柔軟かつ生徒の方向性を明確に示せるようなサポートの仕方が必要となった。以下に実例を挙げる。

(2) 実施内容

- ・福島と世界の架け橋プロジェクト
東日本大震災の語り部として福島の今の姿を伝え、東日本大震災を風化させないために、無知・無関心の人に他県の高校生と対話・交流を行った。
- ・なぜ日本人は他国より英語を使ったコミュニケーション能力が劣っているか
単語やジェスチャーだけでコミュニケーションがとれるのではないかと、という仮説のもと、簡単なディベートを英語で話すイベントを開いた。
- ・アートで障がいという枠を無くすために障がいという言葉を通して理解を深めてより良い社会を目指していきたいという思いをもとに、自分自身が通う施設でパソコンを使ってデジタルのアートを描いた。
- ・福島の魚の安全性を広めるためには？
福島の魚の安全性をPRし、全国に発信することを目的とし、身近な場所で釣れる魚の種類や調理方法の紹介をした。
- ・Caféふう売上あげあげプロジェクト
Caféふうが抱える、赤字であることと、交流の場が生まれにくいことの改善を試みたほか、地域の大人と高校生の交流の場を作るために、対話を目的としたイベントを開催した。
- ・法はブラックでレッドでちょっとグリーン
国連や子どもの権利条約が定めている法律にある、

子どもの意見表明権が日本では普及されていないことに着眼し、日本と他国の法律や現状を比較したほか、地元の弁護士の方や法学部の大学教授へのインタビューを行った。

- ・自分に自信を持とう！
メイクや美容法を使って、一人一人が自分に自信を持ち、自己肯定感を高め、同世代の人と共有したいと思い、メイクの講習会に参加し学んだことを、友人に実践するといったアクションを行った。
- ・演劇で地域を笑顔に
浪江町の現状について調査し、自ら所属する演劇部での活動を用いて、町民とのコミュニケーションを図るイベントを企画、立案し、実際に浪江町を訪れ、演劇ワークショップを開催した。
- ・ゲームで伝える富岡町
富岡町に若い世代が少ないことから、若い世代の人達にゲームを通して富岡町を理解してもらえ、ゲームを制作した。

(3) 成果

身近な話題から地域の課題と結びつけ、自分たちなりに考察の視点を持ち、アクションを行えたことは成果であるといえよう。コロナ禍から明け、地域の方々の協力のもと、アクションを行えたり、また近隣へと出かけ現地調査を行えたりと、行動の幅が広がり、よりデータや素材を收拾することが可能になったことは、探究により深みを持たせられたという意味で大きいと考える。

(4) 課題と展望

今年度はアクションを行う機会は増えつつあったが、地域とのつながりや行動の範囲の限界から、思うように進められない生徒がいた。地域人材とのつながりを大切にしながら、身近な課題と世界の課題をつなげる、広い視野と行動を起こすための思考力、積極性をより持つことで、さらなる知見を深めることができると考える。

3. 3. 2 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たに「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

再生可能エネルギー探究ゼミでは、探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、各々のフィールドワークや基礎実験などをなるべく全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒10名、7つの探究テーマを設定し、探究活動を進めてきた。

(2) 実施内容

①テーマ：色素電池

川内村のブルーベリーの搾りかすからアントシアニン色素を抽出し、実際に太陽光電池を作成するところである。

②テーマ：川内村の魅力を発信！

村の自然に親しみを持ち、どのようにして守られているのかを調べ、その魅力を広めたいと考えている。

③テーマ：人と海の関わり

昨年度の活動をふまえ、海と触れ合い、海を好きになってもらう海洋教育、またそこを通じて防災教育を念頭に活動を行った。請戸漁港の玉野さんたちにお世話になり、ツアーを行うことができた。参加した小学生には心の底に、海洋について前向きな印象を与えるものになったと確信する。



④テーマ：福島の魚

釣り好きが集まり、テーマを「福島の魚」とし処理水問題と関連させて探究している。福島の漁業にさらに深い愛着と使命感を持って生活することを期待する。

⑤テーマ：「海藻を呼び戻すために」

ウニの生態を調べたが、水温や食性に関して様々な知見が得られた。今回の飼育に関しては、2学年の生徒が協力してくれ、今後テーマを変えて引き継がれていることが期待される。

⑥テーマ：スポ GOMI

GOMI（ごみ）という悪印象を持たれそうなものを取り上げ、スポ GOMI という競技にして楽しみ、さらにこみの行く先までにも視点を置いた探究。

⑦テーマ：葛尾村に人を呼ぶために

多くの人に村の存在を知ってもらい魅力を発信したいと考え、ゼミ生や寮生を対象に第二回葛尾村キャンプ(川内村と合同)を実施した。

生徒たちは自分を育んでくれた地域への愛着を再認識するとともに、それを周囲に訴えて何らかの形で受け入れてもらえるという肯定感を持つことができた。



(3) 成果

先にも記したが、今回の活動を通して生徒たちは自分を育んでくれた地域への愛着を再認識するとともに、それを周囲に訴えて何らかの形で受け入れてもらえるという肯定感を持つことができた。、将来の地域の活動に明るい兆しにつながっていくのではないかと感じられた。

(4) 課題と展望

今後もお互いが協力して、各グループの探究活動を進めていきたい。また、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を実現できるように継続的に努力していきたい。

3. 3. 2 アグリビジネス探究ゼミ

アグリビジネス探究ゼミは、双葉郡の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究するゼミである。

(1) はじめに

令和5年度は、スペシャリスト系列農業および商業の生徒から成り、計6名（男子1名女子5名）で実施している。自ら関心のある事柄と「農業」や「商業」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

(2) 実施内容

テーマ及びキーワードは、次の通りである。

テーマ	キーワード	編成
① 檜葉町の魅力発信と特産品を使った商品開発	檜葉町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、さつまいも、ゆず	個人
② オリーブを使って町おこし	六次化産品 オリーブ	個人
③ 大熊町の風評被害払拭に関する探究	大熊町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、いちご、キウイ	個人
④ 小麦粉を使わず米粉を使用したお菓子を作る	小麦アレルギー、六次化産品、風評払拭、米、米粉	個人
⑤ 美容を通して食品廃棄物を減らそう	美容、六次化産品おから、グミ、ガトーショコラ	グループ

(3) 成果

① 檜葉町の魅力発信と特産品を使った商品開発

檜葉町のために何かしたいと思い、私がやりたいことを will can need で表した。 will が物を作りたい Can が農業科で物を作れる need は風評被害の払拭にした。株式会社マルトと連携して、檜葉町のさつまいもを使ったお菓子やパンをつくってPRを行った。



② オリーブを使って町おこし

広野町のオリーブを様々な人達に知ってもらいたいと考え、広野中学校で収穫したオリーブを使ってマドレーヌやクッキーおよびラスクを製造した。



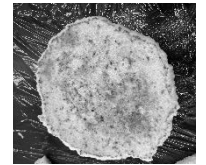
③ 大熊町の風評被害払拭に関する探究

幼い頃、私が住んでいた大熊町は、昔は「フルーツの町大熊」と呼ばれていた。故郷の大熊町の力になりたいと考え、大熊町の特産「いちご」「キウイ」を使って商品を開発し販売を行った。



④ 小麦粉を使わず米粉を使用したお菓子を作る

小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子を開発した。米粉を使用して、パン、煎餅、ホットケーキを製造した。米粉でお菓子を作るのはとても難しいことを知った。



⑤ 美容を通して食品廃棄物を減らそう

美容と組み合わせて食品廃棄物を減らそうと考え、豆腐製造で廃棄される「おから」を使用して、グミ、ガトーショコラを製造した。



(4) 課題と展望

自分で商品を企画し、試作を行ったが、レシピの完成度および製造技術が不十分のため、思うような製品をつくるができなかった。しかし、自分自身、失敗を繰り返して改善しながら学んでいく姿勢が探究活動であると考える。

これまでの活動を通して、自ら地域の方々とコミュニケーションを取り、原料を入手し、イベントに参加するなど、多くの経験を通して深い学びができたと思われる。

3. 3. 2 スポーツと健康探究ゼミ

震災や原発問題の余波もいまだに残り、不自由な環境で生活を送っている人々や風評被害で苦しんでいる地域や人々がいる。スポーツを通してこの地から世界で活躍する選手を輩出することが地域の活性に繋がるはずだ。その一翼を担うトップアスリート生がこれらの地域課題に対して、スポーツを通して何ができるのか。自身の競技力を向上させるためには何が必要なのか。など『スポーツの力』を多方面から考える探究を行った。

(1) はじめに

スポーツを通して持続可能で豊かな地域の実現を探る他、競技力向上、障害の予防などトップアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行い、グローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 方向性の再検討

2年次から本格的に進めてきた探究活動のゴールを目指すためにもう一度、活動内容の再検討をした。自分たちの目的とは何なのか、他に課題解決のための手立てはないのかなど、担当教員との面談などを通して、より深い学びを得るための計画を作成した。2年次で進めてきた活動を継続しつつ、新たな取り組みを加えて進化した探究活動ができるよう再検討の時間を設けた。

② 調査、アクション

2年次からの活動に加えて新たな取り組みを考え、活動してきた。また、担当教員との面談を行い、活動状況を確認しながらアクションが思うように進まない生徒に対してはこちらから寄り添い、できる限り生徒主体になるような支援を心掛けてきた。

高校生アスリートが求める食事とは

寮生活を送る中で、普段食べている寮食がアスリートにとって望ましい味付けや栄養素が含まれているのか疑問を持ち、寮生にアンケートを実施したり、栄養士や医師にインタビューをしたりした結果を踏まえて高校生アスリートが求める理想の献立を考え、実際に調理をし、試食会を行った。



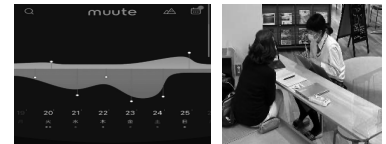
スポーツブランドを通して地域を盛り上げる

双葉郡の魅力を通してスポーツを通して広めたいと考え、本校を会場にしたイベントの立案をした。いわき市にあるアウトドアブランドと連携し、その会社で生産している糸を使用したミサンガ作りの体験ブースを文化祭で出店して実際にスポーツから繋げた地域の情報発信に貢献した。



メンタルの状況はスポーツにどう影響する？

自分の体験から、メンタルの状況がトレーニングやゲームにどのよ



うな影響を及ぼすのかについて探究を深めた。アプリを使用して自分の精神状況をグラフ化したり、専門家から話を聞いたりしたことをまとめた。また、「笑顔」と「言葉」が自身のメンタルや力の発揮にどの様に作用するか実験した。

(3) 成果

本ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列生として日頃からスポーツに真摯に取り組んでおり、競技力向上や障害予防、スポーツを広める、などの競技に絡めた探究を行ってきた。外部の方々と連携を図りスポーツを軸に様々な探究を展開することで、競技をしているだけでは身に付けることのできなかつた知識や考え方に探究を通して学ぶことができ、自身の競技への向き合い方が大きく変わった生徒もいた。多方面から競技（スポーツ）について考えることで、偏った考え方ではなく広い視野を持って物事を捉えられるようになった生徒も多く、将来に繋がった活動であったと感じた。



(4) 課題と展望

一方で、トップアスリート系列の生徒は、3年次になるとそれぞれ最後の大会を控え、今まで以上に競技へ打ち込む時間と熱量が多くなるため、思うようにアクションに取り組めないことも多い。特に9月に最終発表会が行われる非常に限られた時間で計画的、かつ迅速にアクションを実施しなければゴールには近づかない。以前よりもトップアスリート系列が取り組みやすいテーマ設定にはなったが、より担当教員で連携して進捗状況を確認し、見守り、声掛けのバランスを考えながら支援していきたい。この活動が、競技力向上に役立つことのほか、アスリートのセカンドキャリアにも役立つものであることは間違いない。その意味でもトップアスリートの探究活動の在り方を今後も試行錯誤していく。

3. 3. 2 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミでは、14名の生徒が自らの興味・関心のあるキーワードと「健康」や「福祉」の分野を関連させたテーマを設定し、家庭科、体育科、福祉科の教員3名で担当しながら探究活動を進めてきた。生徒が設定したテーマは、障がい者の活躍に目を向けた「パラスポーツの認知度を上げるためには」、HPSの生きづらさを緩和しようとするための「HPSを知ろう」、心の病の防止に着目した「よりよいメンタルヘルスを」、子どもの健康を考えた「運動が苦手な子どもはどうすれば動くことを好んでくれるか」「子どもの嫌いな食べ物をなくそう」、LGBTQ+について取り組んだ「世界はカラフルだ!」「虹色の世界を!!」、双葉郡の地域課題に触れた「さようなら2011 こんにちは2023」「愛とは何か?」「双葉郡と愛」について、それぞれグループ学習や個人研究などを行った。

(1) はじめに

昨年度に設定したテーマで、2年間様々な事柄を知り、様々な人の考えに出会いながら探究活動に取り組んできた。図書室の本やインターネットなどでの調べ学習をはじめ、アンケートの実施、調理、フィールドワークを行い、また定期的に担当教員との面談を実施するなど個に応じた支援を行ってきた。

(2) 実施内容

今年度は3年次の4月下旬に中間発表会を行った。各自で取り組んできた探究活動を共有し合い、振り返りの機会にすることができた。発表を通して、外部講師の方や在校生から様々なコメントを受け、再びアクションを起こすなどし、ブラッシュアップを積み重ねてきた。同時進行でアブストラクト作成、セルフエッセイを書き、9月に最終発表を行った。その後、論文の執筆にあたった。

ここでは、「双葉郡と愛」についての研究を紹介する。ウェディングプランナーになりたいと思っている一方で、コロナ禍、結婚式場がないなど様々な理由で結婚式を挙げることができていない人がいることを知った。結婚式を主催したいという好奇心から英語の授業でクラスの人たちと協働し合い、ダニエル先生夫妻の結婚式を執り行うことに成功し、自信を得ることができた。



しかし、双葉郡葛尾村で結婚式を挙げることは想像以上に、簡単なことではなかった。結婚式の実施計画を立

案したが、熱中症の心配、お盆、稲刈りで忙しいなどの理由から実施が困難になってしまった。式の実現はできなかったが、葛尾村に足を運び、昔、葛尾村で行われていた“祝言式”と呼ばれる日本古来の結婚式のお話や、東日本大震災後の変容を知ることができた。



また餅つき、山菜取り、田植えなどの体験を通して地域の方との交流を深めることができた。

(3) 成果

このように探究活動を進める中での葛藤や失敗は、新たなことに気付かされると同時に、次なる手立ての思考力、原動力となり、問題解決力が鍛えられた。また、地域をフィールドワークしたことで地域社会の理解につながったことや、地域社会の一員としての意識を高めるなど、プラスの影響をもたらすことができた。さらに地域の方との対話、文化的な体験活動は、より良い未来への創造につながることを期待できる。

(4) 課題と展望

生徒自身の興味・関心がどのように発展したであろうか。「探究の時間が楽しみ」、「探究の時間にこれがやりたい」など、生徒が自律的に行えるような探究心と様々な人との連携体制が課題である。今後も探究を通して身に付けた力を活かし、様々な経験を重ね、人間として何をすべきか、どのようにすべきかなどを考え続け、地域の未来を創る取り組みにつなげていきたいと考えている。

3. 3. 3 進路探究 キャリア学習

(1) はじめに

2年次より「進路探究」として設けられたこの時間であるが、3年次ではより生徒たちが将来の進路について深め、自己を見直し、進路実現に向けて自ら具体的に動き出すための時間として位置づけた。主に進学希望者、就職希望者と、希望進路別に分けた講座と全体に関わる講座に分け、外部講師による講演等を中心に展開していた。

(2) 実施内容

・ライセンスアカデミーによる面接、小論文指導

6月、進学・就職者全員を対象に開催した。面接指導は各クラスに1人ずつ講師が配置され、面接の意義の説明の後、実技指導が行われた。入退室の仕方、姿勢、質問に対する答え方等、具体的にご指導いただいたほか、クラスの生徒の前で一人ずつの実践であったことから、良い緊張感を持った状態で生徒は練習できたようである。

小論文も同様にその意義と具体的な書き方、実践演習とその添削という流れで行われた。進路希望が明確でない限り、小論文や志望理由書は思うように書けない、ということを生徒は自覚し、今後の進路活動に向けて大きく舵をきった者も多かったようである。

・奨学金に関する講義

上記の面接、小論文指導と時期を同じくして開催した。進路に関わるお金について、生徒自身が理解することで、進学の際の金銭面におけるトラブルを防止するとともに、進学先が明確でない限り金銭的な見通しも立たない、という観点から、面接や小論文指導等の進学指導と時期を合わせて開催した。「進路月間」のようになったが、それぞれの関連性を生徒も理解し、特に自らの進路をなかなか決められない生徒にとっては、具体的に動き出さなければいけないという自覚を持つことができたと思う。

・共通テスト申し込み指導／共通テスト事前指導

共通テスト受験者に向けた指導。例年行われているが、コロナ禍明けということで特に前年、前々年と異なるところや、教科、科目の確認など細部にわたっての指導を実施した。直前の事前指導では、会場までの交通手段、当日の注意事項や万が一の事態の対応など

を、いずれも進路指導部が中心となり進めた。

・着こなしセミナー／ビジネスマナー講座

進路が決定した生徒が多くなってきた時期に、社会人としての在り方を外部講師を招聘して講演いただいた。着こなしセミナーでは、公的な場での着こなしや振る舞いを、紳士服コナカ平店店長からご指導いただいた。生徒をモデルとして、スーツの着こなしや、冠婚葬祭時の服装、バッグや靴の選び方について紹介していただいた。生徒自身が着用した感想を述べたり、トレンドや色の組み合わせ等について説明があったりしたため、生徒は興味深く臨んでいた。

・本校就職支援員による講話

就職希望者を対象に、定期的に行われる。本校進路指導部に常駐する就職支援員の方から、就職先の選び方、求人票の見方、企業見学や受験当日の心構えなどを生徒の進路希望に合わせて丁寧にご指導いただいた。企業から内定をいただいたのちも、今身に付けておくべきことや今後各会社において必要となることなどを生徒に教示していただき、毎度、生徒は身の引き締まるような思いで拝聴していた。

(3) 成果と課題

生徒の進路意識を高め、具体的な行動を促していくという当初の目的に関しては意義のある結果が出たと思う。特に時期を定めて、進学について志望理由書の書き方や奨学金など多方面に考えなければいけないことや、保護者との相談が欠かせないことを生徒に自覚させられたことは大きな収穫であったと言える。生徒も、これらの講座をある時期にまとめて行ったことで、前向きな姿勢で取り組み、また、自ら進路先について調べたり、保護者と話を進めたりといった、具体的な行動に結びつけられたと言えよう。課題としては進学、就職それぞれの進路先が決定したのち、より気を引き締めて「社会に出るとはどういうことか」を自覚させられるような手を打った方がよいのではないかという点である。生徒の気が抜けないうちに、進路先に向けての学習や、就職先での業務について考えさせられれば、最後まで落ち着いた生活で学習に打ち込めるのではないだろうか。

3. 3. 4 探究活動発展のための発表会（未来創造探究 生徒研究発表会）

高校2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。今年度は高校が61、中学が14プロジェクト参加し、加えてWWL 県外連携校である仙台二華高校の生徒たちを招き、3プロジェクトに探究活動の取り組みについて発表してもらった。発表部門はコンテスト部門と対話交流部門、ポスターセッション部門（ポスターまたはスライド）の3つに分け、コンテスト部門の上位発表のみを全体会に進出する形式を取った。

（1）概要

- ① 目標
- 1) 地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D 表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 2) 発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 3) 保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。

② 日時 令和5年9月24日（日）8：40～15：45

③ 内容 9：00～11：40 分科会

コンテスト部門 9：00～11：00

対話交流部門 9：00～11：40

ポスターセッション部門 9：10～11：15

11：40～12：30 昼食・休憩

13：00～15：00 全体会

15：05～15：30 閉会行事（結果発表、総評）

④ 審査員 専門知・地域地を持つ審査員7名

	氏名	所属	
1	田村 学 様	國學院大學人間開発学部教授	全体会審査員
2	松岡 俊二 様	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科 教授	全体会審査員
3	平山 勉 様	一般社団法人 双葉郡未来会議 代表理事	全体会審査員
4	青木 淑子 様	富岡町3.11を語る会、元富岡高校校長	コンテスト1 審査員
5	永井 祐二 様	早稲田大学 環境総合研究センター 研究院教授	コンテスト1 審査員
6	前川 直哉 様	福島大学 教育推進機構 准教授	コンテスト2 審査員
7	佐藤 亜紀 様	HAMADOORI13 事務局	コンテスト2 審査員

（2）詳細

① コンテスト部門

コンテスト部門における発表のチェックポイントとして、以下の項目を示した。

- ・地域が抱える課題をおさえているか
- ・全国や世界の課題と照らし合わせた考察があるか
- ・課題解決に向けた調査や実践の報告があるか
- ・社会や未来に向けた提言があるか

・学んできた内容を自分の進路や生き方に繋げているか
分科会においては上記審査員に加え本校教員がチェックポイントに基づき審査を行い、上位4プロジェクトが全体会で発表する流れとなった。

今年度は高校から10プロジェクト、中学から4プロジェクトがコンテスト部門に出場し、7プロジェクトずつ2会場を用いて分科会を実施した（発表プロジェクト詳細は【資料4】参照）。特徴として、高校は6つのゼミ

から満遍なくコンテスト部門に挑戦するプロジェクトがあり、発表内容も多様なものとなったことが挙げられる。

表彰結果は以下の通りである。

「未来創造探究 最優秀発表賞」・・・1件

・ウニと生態系

「未来創造探究 優秀発表賞」・・・3件程度

・法はブラックでレッドでちょっとグリーン

・海を学ぼう!!!

・Café ふう売上あげあげプロジェクト～人と人が繋がる居場所～

「未来創造探究 発表賞」・・・3件程度

・海洋放出について考えるー反対運動を始点にー

・私と檜葉とさつまいも

「未来創造学 優秀発表賞」・・・2件程度

・鉄を追い

・Imagine future energy

「共感賞」・・・全体発表から生徒投票で1件選出

・法はブラックでレッドでちょっとグリーン



② 対話交流部門

本部門では賞は設けず、会場ごとのメンバーで対話の時間を多めに設定し、探究活動のヒントや課題に対する考え方について議論を深めることを目的とした。他2部門とは異なり、発表と聴講だけでなく、生徒や教員、地域の方々と一緒に話合い、模造紙にメモ用紙を貼りながら意見交換する形式で進めた。

高校からは8プロジェクト、中学からは3プロジェクトが参加した。話し合う内容が複雑にならないようにある程度テーマ(『#〇〇』の形式で示した)の近いものを会場ごとに分けて配置した。詳細は【資料5】参照。

《第一会場テーマ》

[前半] #周囲にどのように関心を持ってもらうか

[後半] #インクルーシブ・障がい

《第二会場テーマ》

[前半] #ウェルビーイング・豊かさ

[後半] #国際交流

《第三会場テーマ》



#震災後の風化とまちづくり@富岡

対話主体の発表形式は昨年度から続く試みであったが、今年度は全体プロジェクト数が例年に比べて少なかったこと、3部門に分かれていたこともあり、比較的少数での対話が可能となり、活発に議論が行われた。

③ ポスターセッション部門 (ポスター/スライド)

将来的に WWL 国際会議を開催することを踏まえて、コロナ禍以来あまり行われてこなかったポスター形式の発表ができる部門を作るということで今年度新設した。高校3年次にとっては、これまでのプレ発表会(2年次10月)、中間発表会(3年次4月)ともにスライド発表のみとしており、ポスター制作・発表は初めてとなる生徒がほとんどだったため、アリーナ会場に電子黒板を運び込んでスライド発表もできる選択式とした。

ポスター発表もスライド発表も、1プロジェクトにつき2回発表する機会を与え、会場内で生徒が見て回れるように時間も調整したため、発表・聴講をバランスよく行うことができた。WWL 県外連携校である仙台二華高校にはこちらの部門で参加していただき、本校生徒たちにとって非常に良い刺激となる発表をしてもらった。

会場内に投票台紙を設置し、ポスターセッション部門共感賞を選考した。

「ポスターセッション部門共感賞(高校の部)」・・・1件

・ハートの強さで勝利を掴め!

「ポスターセッション部門共感賞(中学の部)」・・・1件

・自分が双葉の良さになるには

(3) 成果と課題

3つの部門を設けたことで、生徒の様々な発表スタイルやニーズに応える形となり、探究活動の深化・質の高いフィードバックの提供につながった。

審査員からは、生徒の「取り組み方」に対する多様な表彰を設定することや、生徒・教員が共に学ぶ、教科学習と総合学習の好循環モデルの創出と組織的な対応についてのご助言をいただいた。

次年度からは3年次5月に最終発表会の時期を早めることとなる。ポスターセッション発表のための機会をいかに与えていくか、より多様化する探究内容にあった発表形式・部門や会場編成をどのように設定していくかについて考えていかなければならない。

3. 4 海外・国内研修

3. 4. 1 ドイツ研修

本校では、開校年度からドイツを訪れている。本校における高校一年次ドイツ研修では、地方創生イノベーションスクールの一環として、Think Green をテーマとし、2030 年に問題となる地域の課題と共通する世界的な課題についてアクションを提言するため、平成 28 年度にミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校と交流を行った。それ以来、同校とはオンラインも含めた交流を毎年継続している。本校では未来創造探究として、原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりについて、それらを福島のみならず、全世界が共有するべき「持続可能な社会づくり」として探究している。ドイツの環境都市フライブルクを訪問することにより、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩とするためにドイツ研修を実施した。東日本大震災によって、地域課題の先進地ともいえる状況に陥った福島県・双葉郡が、どのような街づくりを行っていくべきかについて考え、帰国後の学びに繋げた。

1. 日程・参加者

派遣期間： 令和 6 年 1 月 6 日（土）～16 日（火）
参加生徒：

役職	番号氏名
リーダー	1511 鈴木 里桜
副リーダー	1422 長谷川翔哉
副リーダー	1527 門馬 沙英
事前研修	1414 齋藤 琴音
事前研修	1526 山野辺翔太
スケジュール管理	1411 車田 秀雄
スケジュール管理	1523 村山昊志朗
記録	1417 須藤 翔磨
記録	1528 吉田はるか

引率団：

齋藤夏菜子(英語科・企画研究開発部副主任)
小林 知弘(英語科・高校 1 学年担任)

2. 実施内容(日本での事前研修)

(1) Ernst Mach Gymnasium 校との交流

事前に、それぞれのプロフィールを共有し、ホームステイのパートナーを決めた。その後個人で連絡を取り合い、オンラインによる交流が続いてきた。年末年始を使ってバーチャルホームステイも行い、日本の食事や文化、部屋の様子などを紹介し、交流を深めた。

(2) 在外県人会の方々との交流

期日：令和 5 年 11 月 16 日（木）

在外県人会サミットとは、海外の福島県人会と県、県人会同士の交流を拡大し、在外県人会のネットワークによる本県の現状や魅力等の発信と本県の復興・創生を加速することを目的に開催されているものである。その第 4 回が開かれ、訪問先の一つとして本校を訪問した。学校を代表して学校紹介のプレゼンテーションを行い、校舎内を案内した。



(3) 小松理虔さんによる講話

期日：令和 5 年 11 月 22 日（水）

小名浜の活動家、小松理虔さんが提唱する「共事者」という考え方についてご本人に講話を依頼した。この講話は、メンバーからのリクエストで実現したものである。また、このイベントはオープンにし、誰でも参加できるようにした。

小松さんの言う「共事者」について齋藤幸平という人はこのように言及している。

「当事者と非当事者の線引きは分断を生む。「真の当事者」へと語りを限定していくことが、多くの人にとって「自分には語る資格がない」どころか、考える能力さえも奪うことになる。その先にあるのは無関心と忘却。それでは社会問題は全く改善しない。「自分は当事者ではないから発言するのを控えよう」というのは一見マイノリティに配慮しているようで、単にマジョリティの思考放棄、それは考えなくても済むマジョリティの甘えであり、特権。3.11 誰もが加害者であり被害者でもある。それが「共事者性」。(『ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと戦い、水俣で泣いた』KADOKAWA)

社会課題に対して、どんな濃淡があってもいいから、「自分は共事者である」と言うことができれば、社会課題の解決のために一歩を踏み出すハードルが下がるはずだ。

震災から 12 年以上経った今、新たに ALPS 処理水の海洋放出のような新たな課題が生まれている。より一層、当事者を置き去りにしない、共事の心が大切だということを学んだ。



(4) 会津大学・留学生との交流

期日：令和 5 年 11 月 23 日（木）、24 日（金）
会津大学の外国人留学生と共に、双葉郡の震災遺構や南相馬のロボットテストフィールドなど様々な箇所をまわった。詳細については別途記録があるので省略する (3.4.4)。

(5) プレゼン・演劇作成

ドイツで発表するプレゼンテーションと演劇は、ゼロから生徒たちが議論して考えた。世界の様々な問題や、震災や過去の歴史に対する記憶の継承

について、当事者という言葉で分断を生むのではなく、共事の心を持って対話（オープン・ダイアログ）することの大切さを伝えたかったのだが、そもそもチームの中でオープン・ダイアログができてきているのか？という疑問に至った。伝えたいことを考えながら、果たして自分たちはそれが出来ているのか？という問いは、彼らを大きく揺るがし、チームとして研修に取り組む姿勢を変えるきっかけとなった。

(6) Facebook を活用した事前インプット

昨年度からの新カリキュラムにより、アカデミック系列が毎日 7 時間の時間割となった。集合研修の時間を捻出することや、学校内外の授業外の活動を全員で行うことはこれまで以上に困難を極めた。そこで、Facebook グループを作成し、そこに企画研究開発部の教員や地域の方などに入っていただき、研修日程の共有、研修内容や写真・動画の共有などで活用した。



地歴科の教員からはドイツに行く前に知っておくべき歴史についての解説動画や、プレゼンや演劇を作る上で知っておくべき世界情勢についての Web リンク等が共有され、生徒は自分のペースでインプット学習を行うことができた。



(7) 調理実習

現地の交流会で日本食を作るため、冬休みを使って調理の練習をした。現地で手に入る食材と、日本から持っていきべき食材を考え、豚汁、ほうれん草のおひたし、だし巻き卵、おにぎりを作ることにした。ドイツからの留学生も一緒に参加し、ドイツのお菓子を作り一緒に食べるなど、忙しい事前研修の合間の息抜きとしても良いリフレッシュとなった。

(8) ALT との英会話練習

毎日昼休みの 30 分を使って、ローテーションで英会話を行った。日常会話を中心に、ALT にホームステイを意識した実践的なレッスンを用意してもらい、少人数でじっくり話すという訓練をした。少人数制にしたことで、一人一人丁寧にすることができ、生徒たちも英会話を楽しむことができた。

3. 実施内容(現地での研修)

(1)フライブルク

① tram による移動

フライブルクの住民が日頃使っている、tram

(路面電車) を使って移動をした。フライブルクの tram は、環境保全のための交通政策と切っても切れない関係にある。70 年代に酸性雨による黒い森の枯死が起き、それが自動車交通量の増加による排気ガス汚染が原因だったことから、少しでも自動車排気ガスを減らすために、自動車から徒歩・自転車や公共交通への転換をはかろうという機運が高まった。フライブルク市は都心への自動車乗り入れを規制し、郊外から来たクルマは、tram の駅に隣接したパークアンドライド駐車場に停めて、tram に乗り換えて都心に向かう。路面電車の線路には、騒音防止だけでなく環境保全のために芝生が植えられている。tram での移動は過去の研修でもなかったことであり、いかに tram が便利な乗り物かを体験することができた。



② エコステーション(環境教育センター)

エコステーションは 1986 年に BUND (ドイツ環境自然保護協会) の働きかけで完成した建物である。1986 年はチェルノブイリ原発事故の年であり、環境について考える機運が高まった年でもあった。ここには、1 期生が訪問した際に植えた木がある。まずはその木を見に行った。



その後、屋内に戻り、地球が 1 年間に生み出す生物資源を、年初から数えて人類が使い果たしてしまう日を示す「アースオーバーシュートデー」についての講義を受けた後、市販の化粧品やクリームなどに入った液体プラスチックを調べ、その後自然素材を使って石鹸やスキンケア製品を作ることによってプラスチックフリーな選択ができるということを学んだ。

最後に、地域の方々も招いて我々が用意したプレゼンテーションと演劇を披露した。現在の原子力発電所における ALPS 処理水の海洋放出の問題について、研修チームなりに対話を重ねて出した考えについて、ドイツの環境自然保護の観点から忌憚らない意見をもらうことができた。

日本は震災後、原発の稼働を停止しているが、その代替となるエネルギーを自給することができ

ず、化石燃料の輸入に頼っている。昨年末にドバイで COP28 が開かれ、「原子力発電の設備容量を 2050 年までに世界で 3 倍にする」という宣言に、22 カ国が賛同した。今後原発をどうしていくかは日本のエネルギーを考える上で避けて通れない問題であり、このことについてフライブルクの方々と意見を交わすことができたことは貴重な経験となった。



③リヒャルトフェーレンバッハ職業訓練学校

この学校は、日本で言う実業高校にあたる。日本との違いは、入学前に自分が将来就職する企業と契約を交わす必要があり、生徒は将来の具体的な目標を実現するために、就職後に即戦力となる理論と技術を学ぶことができる。そのため、徹底した現場主義を貫いており、実習に使うボイラーや自動車等の機材はできるだけ最新のものを取り入れて授業を行う。勿論、環境に対する配慮も欠かしていない。また、移民を教育するプログラムがあり、職業訓練と言語教育など移民が社会で受け入れられるための技術を習得させることに力を入れている。ウクライナからの移民も多く受け入れているという話も聞くことができた。



④ヴォーバン地区

第二次世界大戦後に市が買い取り、多様な住民が快適な生活を送れるように開発を進めた最先端のエコタウンである。団地を建設する際には、設計から住民を巻き込んだと聞き、その能動性市民性に驚いた。

街全体がいくつかのブロックに分かれており、従来のように家の前に車が通れる道路があるブロックもあれば、住宅地に一切車を入れないよう設計されているブロックもあり、開発当時住民がニーズに合わせて住むブロックを選んでいった。子育て世帯の居住者が多いエリアは、大きな公園を挟んで団地が建っており、地域住民全体で子供を見守ることができる仕組みになっていた。また、大きな窓から太陽光を取り入れ、暖房の使用頻度を減らすことができるパッシブハウス仕様になっており、子供や環境に優しい作りになっていた。

⑤フライブルク大聖堂

フライブルクのミッテ（旧市街地）を案内して



いただき、石畳とベヒレ（水路）が美しい街並みを歩いた。とりわけ美しいのが、旧市街地中心部にあるフライブルク大聖堂である。1354 年に起工、1513 年に完成。ロマネスク様式とゴシック様式が混在し、高さ 116 メートルの尖塔がある。芸術的価値が高い祭壇やステンドグラス、彫刻などの装飾の美しさには感嘆の声が上がった。

大聖堂の外では、普段はマーケットがぎっしり立ち並び賑わっているのだが、この日は農家のストライキの影響でお店がほとんどなかった。何千人もの農民がトラクターを持って集まり、連邦政府の農業政策に対する抗議デモが行われていた。当日は CNN や BCC などでも取り上げられており、現地に来なければ見ることができない光景だった。



(2)ミュンヘン

①Ernst Mach Gymnasium 校との交流

ミュンヘンでは全員がホームステイをするため、初日の朝はホテルをチェックアウトし、全ての荷物を持ってタクシーで EMG に向かった。事前にオンラインで交流を深めてきたため、学校ではやっと会えたことを抱き合って喜んでいった。我々の発表では、ドイツ語による自己紹介から始まり、フライブルク以降ブラッシュアップしてきたプレゼンと演劇を発表した。

EMG の生徒や教員は発表



に熱心に耳を傾け、たくさんの感想や質問をくれた。

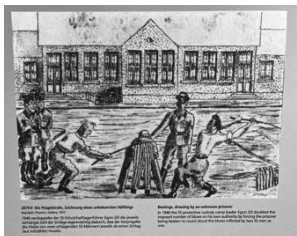
夜は、学校の近くの公民館で夕食会を開いた。我々は日本食を、EMG の生徒達はバイエルン地方の

郷土料理を作り、ホストファミリーや多くの学校関係者も参加しての楽しい会となった。ドイツの生徒の反応が知りたいと興味本位で作った納豆巻きが思いの外大人気で驚いた。この日からそれぞれがホストファミリーの元で3泊4日を過ごすこととなった。



②ダッハウ強制収容所

ダッハウ強制収容所は、ナチスが1933年に設立した最初の常設強制収容所である。親衛隊の収容所護衛兵のトレーニングセンターであり、この組織と慣例がすべてのナチス強制収容所のモデルとなった。歴史総合の授業で「検証 ナチスは『良いこと』もしたのか？」(小野寺拓也・田野大輔/岩波ブックレット)を読み、事前研修として「夜と霧」(ヴィクトール・E・フランクル)の内容に触れていた。



Arbeit macht frei (働けば自由になれる)という文字が刻まれた門を通り、広大な敷地を歩いた。展示室には、収容時に没収された遺品や、当時の証言、写真、映像が並び、その凄惨さに生徒は言葉が失っていた。

この収容所の初期の囚人は、ナチスの政治に反対する活動家や、ドイツ共産党員、社会民主党员、労働組合員、エホバの証人、ロマ族(ジプシー)、同性愛者、常習犯で占められていた。一万人以上のユダヤ人男性が収容された(水晶の夜)と呼ばれる暴力の結果、ダッハウ収容所のユダヤ人の囚人数は、増加した。更に、ドイツを発展させるために収容所の人たちは軍事工場や自動車製造、鉄道、また、新しい強制収容所を作るためなどの理由で強制的に労働を強いられていた。ドイツにとって強制収容所は大事な「産業」だったという。

今回、EMGの生徒も数名同行した。日本の高校生とドイツの高校生と一緒に展示を見てまわり、このようなことを2度と繰り返さないためにはどうすれば良いのか共に考えることができた。

この日はとても寒く、防寒着を着ていても寒さが身に染みる天気だった。当時、この場所で、最低限の薄い衣服で身を寄せ合って暮らしていた人々は、我々以上に苦しい寒さを経験していたのだと想像した。

ドイツでは、自国の過ちを認めている。教育にお

いてもナチスのプロパガンダを繰り返さないために、批判的思考力を大切にしているという。振り返りで、生徒から「自分達の歴史教育について考えたい」「東日本大震災や原子力災害について、私たちは学校で当たり前のように学ぶけれど、県内の他の学校はどうだろう。知識の格差をどうすれば埋められるだろう」という問いが出た。引き続き事後研修で議論していきたい。

③ミュンヘン市街地案内

ミュンヘン滞在中は、本校で訪問を予定していたダッハウ強制収容所や最終日のFamily Dayを除いて、現地でのプログラムは全てEMGの生徒と先生がプログラムを考えてくださった。生徒によるガイドも大変分かりやすく、楽しく4日間過ごすことができた。

現地でのプログラム内容は以下の通り。

1/11(木): ドイツ博物館

1/12(金): マリエン広場周辺ツアー

(聖ペーター教会、ビクトリアマーケット他)

1/13(土): ヘレンキームゼー城ツアー

1/14(日): Family Day (ホストファミリーとの1日)

EMGの生徒たちは、ツアーガイドとして素晴らしいアテンドをしてくれた。街の歴史や、建物の説明など、事前に時間をかけて準備してくれていたのだろうということが伺えた。いつかEMGの生徒達が日本を訪問することがあれば全力でお迎えし、これまでの恩返しをしたい。彼らのホスピタリティーに心から感謝している。



④ホームステイ

EMGの生徒の家庭に1人ずつホームステイをした。現地の家庭で数日過ごし、異文化生活を体験したことによって、国や文化の違いを楽しみ、友情を育んだ。最後の別れの時間、ホストファミリーと涙を流して抱き合う姿に、特別な時間を過ごしたことが伺えた。



4. 研修の成果と課題

開校年度から続く研修であり、現地校との繋がりも強固なものになっている。今後もお互いにとって学びの深い交流となるようにしていきたい。課題としては、帰国後の学びの共有である。校内だけでなく、地域にも広く学びの還元ができるよう発表の機会を持つと共に、多様な方と学びの共有と対話の場を持ちたいと考えている。

3. 4. 2 ニューヨーク研修（令和4年度）

本校がSGH指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナ感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされていた。SGH指定最終年度となった2019年度（本校4期生）およびグローバル型初年度の2020年度（本校5期生）、そして昨年度（本校6期生）も渡航を断念してきた。このような状況のため3年に渡って国内での代替研修を実施してきたが、今年度（本校7期生）は3期生以来4年ぶりにニューヨーク現地への渡航が可能になった。

（1）チームビルディング

本研修は、地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたいという意志を持った8名の生徒たちが選抜された。原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者8名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

（2）事前研修①（伝承館研修、語り部交流会）

期日：令和4年12月21日（水）

令和5年1月23日（月）

令和4年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の一環として、NY研修参加生徒7名で東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、当時の被害状況への理解を深め、福島の実況の課題について把握した。

上記イベントに参加できなかった生徒1名について、後日伝承館で行われた令和4年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部交流会」にオンライン参加し、プレゼンテーションを用いて自身の被災体験と現在の学校生活について発表を実施するとともに、県内高校生の被災体験や取り組みについての発表を聞いた。

（3）事前研修②（会津大学留学生との交流）

期日：令和5年2月20日（月）

会津大学主催のプログラム「2022年度東日本大震災・原子力災害伝承館と福島ロボットテストフィールド等視察」へ参加した。同プログラムでは上記2つの施設に加えて請戸小学校を訪れ、福島が抱えてきた課題と復興への取り組みを客観的にとらえ、今後革新的な未来のために何ができるかを実感することを目的としている。

会津大学からは13名の留学生を含む21名が参加し、本校NY研修生徒8名、留学生2名と合わせて計31名がグループに分かれて研修を行った。

英語を用いたコミュニケーションのみならず、外国人から見た福島の印象や、専門分野を学ぶ大学生ならではの思考から未来の可能性について共に探る良い機会となった。



（4）事前研修③（その他）

以下の内容を事前研修として実施した。

- ・英語コミュニケーションのトレーニング
- ・課題図書『This Very Tree』（Sean Rubin 著）、『災害ユートピア』（Rebecca Solnit 著）、教育関連書籍を各自1冊選択
- ・社会科教員による9.11、アメリカ史講義
- ・映画『1/10 Fukushima をきいてみる 2022』鑑賞会&交流会参加
- ・小玉直也氏（NPO 法人アースウォーカーズ）との懇談
- ・NHK Special 混迷の世紀 第9回「ドキュメント国連安保理～密着・もうひとつの“戦場”～」視聴と哲学対話
- ・UNIS-UN 2023 Conference Debate 練習

上記に加えて、NY現地でのプレゼンテーションに向けたスピーチ作成、スライド作成、プレゼンテーション練習、UNIS-UN Cultural Showcaseで披露するダンスの練習等を実施した。

（5）ニューヨーク現地での研修

期日：令和5年3月10日（金）～18日（土）

活動内容：

① 国際機関関係者との意見交換

国連日本政府代表部による「国連とSDGs」に関する

講義を聞き、福島の人たちが持続可能な世界の実現に向けて何を為すべきなのかを考える。また、各国の国連関係者に福島復興に向けた自身の実践について発表を行い、持続可能な世界の実現について意見交換を行う。

② UNIS-UN での各国同世代との交流

国連職員の子弟等が通学する UNIS (国連国際学校) が主催し、各国の高校生が参加する生徒国際会議 UNIS-UN (会場：国連総会会議場) に参加し、各国の同世代とグローバルな課題について議論を行い、交流する。

(2023 テーマ：Turning the Page: A New Chapter in Education)

③ 現地 NPO と連携した同世代生徒意見交換

現地の NPO と連携し、NY の多様性を包含するコミュニティ形成について学ぶとともに、市内在住の同世代に福島復興に向けた自身の実践について発表し、グローバルな課題について意見交換を行い、交流する。

④ 現地行政職員との意見交換

NY 市の職員に向けた自身の実践について発表し、福島と世界の課題解決について意見交換を行う。

⑤ シティズンシップに関するフィールドワーク

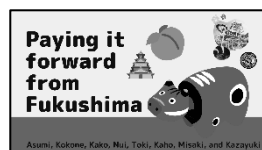
The Apollo Theater や Schomburg Center for Research in Black Culture で、NY における黒人文化の歴史と、その記憶の伝承等について学ぶ。また、9.11 Memorial Museum の視察と意見交換を行う。

⑥ 生徒たちの計画による自由研修

多様性と能動的市民性が息づくニューヨークの文化を体感する。また、異国の地で行き先や移動手段も自分たち自身で計画し行動する経験を積む。

プレゼンテーション発表内容：

『Paying it forward
from Fukushima』



2011 年 3 月の東日本大震災・原子力災害発生時の自分たちの体験とふたば未来学園入学後に学んだことを踏まえて、次世代への「恩送り」として地域社会あるいは世界に向けて活動していることを紹介し、福島の現状の課題を解決に導くための対話の場 (Open Dialogue) の必要性を訴える内容である。 ※Canva でスライド作成

3月10日 (金)

初日は、NY 市役所の Chisato Shimada 氏、同僚の Christopher Haight 氏、Naiyiri Booker 氏をホテルの一室に招き、用意したプレゼンテーションを見ていただ

き、対話の時間を設けた。

Christopher 氏と Naiyiri 氏は NY 市役所公園局の水に関わる (川、池、海、湿地等) 研究者の方々である。プレゼンテーション内で言及した福島の原発処理水の問題を中心に、生徒の探究活動のヒントになるようなアドバイスを多数いただいた。

3月11日 (土)

2 日目は黒人文化の原風景が残るハーレムでの研修として、まずは The Apollo Theater を見学した。The Apollo Theater の歴史、ハーレムはどういう街なのかについて学んだ。

その後は African Market の散策を実施。セネガル出身の方が開いた店に案内していただき、Africa in Harlem という取り組み・考え方や、黒人やアフリカに住む人々に対する偏見についての話を聞く機会に恵まれた。

午後は黒人文化の歴史のアーカイブが残る Schomburg Center の見学と、ハーレムの学生たちとの交流を実施した。アイスブレイクのゲームで親睦を深め、生徒が準備したプレゼンテーションを発表した。ハーレムの学生たちは、最初は福島のことをほとんど知らなかったが、発表を通して、福島が直面している風評被害や処理水の問題と、黒人差別の歴史やミンガン州フリントの水汚染公害問題を重ねて、共感しながら真剣に聞いてくれた。

3月12日 (日)

3 日目は 9.11 家族会の Meriam 氏と 1 日目もお世話になった Chisato Shimada 氏の案内で World Trade Center 周辺の散策を行った。Meriam 氏は写真を見せて当時を振り返りながら、9.11 の出来事について丁寧に説明して下さった。

9/11 Memorial Museum の視察では、事前研修で複数回訪れた東日本大震災・原子力災害伝承館と同じ役割を有する施設の見学を通し、歴史を後世へ伝え残すこと、それを学ぶことの大切さを改めて感じる事ができた。

その後は、本校の NY 研修で縁のあるロバート柳澤氏のご自宅を訪問した。Meriam 氏を始めとする 9.11 家族会の方々にも集まってお話しいただき、生徒によるプレゼンを実施した。家族会の方々には真摯に生徒のプレゼンを聞き、多数の質問とコメントをして下さった。用意していただいたご馳走をいただく中で、日本に留学予定の学生とコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿も見られた。

3月13日 (月)

4日目、午前中は国際連合日本政府代表部を訪問し、志野光子大使、大嶋勝公使のお二方にご挨拶をさせていただきました。生徒は事前研修として視聴した番組の感想と、それを踏まえた対話の内容、NY Project の取り組みについて報告した。志野大使と大嶋公使からは激励の言葉をいただき、その後生徒の探究活動に関する質問を基に対話を行った。

続いて児玉啓佑参事官にご挨拶し、国連やSDGs、児玉参事官自身の取り組み等についてのブリーフィングに参加した。プレゼンテーション披露では「想像以上に素晴らしいものでした」と感想をいただき、プレゼンをより良くするためのアドバイスや探究活動への助言、チームプロジェクトにおいて大切にすべきことなどを教えていただいた。

午後はUNIS (United Nations International School) のプログラムに参加した。Cultural Showcaseには各国の高校生が参加し、自国の文化を紹介するパフォーマンスを披露した。本校生徒も事前に申し込みをしており、何度も練習したダンスで会場を盛り上げることができた。生徒は国籍が異なる相手とでも感動を共有できる楽しさや達成感を感じたようだ。

その後は生徒の希望に応じて2つのWorkshopへ参加し、周りの外国人生徒とコミュニケーションを取ったり、協働して作品を作り上げたりした。

3月14日(火)

5日目は国連国際学校 UNIS (United Nations International School) が主催する生徒国際会議UNIS-UNへ参加した。世界中の学生が国連本部のGeneral Assembly Hall (総会議場)に集い、講話を聞いたりDebateをしたりするプログラムである。

【Day1 Keynote Speaker (講演者) と概要】

- ・ Mr. Christopher de Bono, Deputy Director responsible for Communications, UNICEF 気候変動によって教育の機会を奪われる子どもたち
- ・ Sheikh Manssour bin Mussallam, Secretary-General, Organization of Educational 教育で何を学ぶべきか
- ・ Dr. Lauren Rumble, Associate Director Gender Equality for UNICEF 教育のジェンダー平等、女性の教育機会均等について

Day1のDebate Motionは“*Incorporating AI into education will have positive or negative effects*”であった。事前に選ばれた学生が議論するのを聞き、最終的に投票を行う。事前研修でALTの協力の下、立場を

決めて理由や根拠を考えてきたこともあり、いくつかの例や単語について聞き取って自分なりに考えることができたようだ。

3月15日(水)

【Day2 Keynote Speaker (講演者) と概要】

・ Dr. Roser Salavert, Co-Founder and Director of the NYS/NYC Professional Development 「他人の靴を履く」思いやりのある教育システム

・ Soraya Fouladi, Founder and CEO of Jara eラーニングの普及、The Jara Unitの紹介

※上記に加え、Student Moderated Panel Discussion

Day2のDebate Motionは“*Education should be private rather than public.*”であった。結果的に指名されることはなかったが、本校ならではの視点から様々な要素について考え、質問を準備して挙手することができた。3期生ぶりのUNIS-UNの現地参加はハードルの高いものだったが、生徒は色々な新しい経験をしたり、教育の世界的な問題について自分事として考えたりする機会を得ることができた。

3月16日(木)

最終日となる7日目は、国連本部Civil Society UnitのHawa氏や、UN Youth Representativesの皆様、福島の問題と世界の問題を重ね合わせつつ、持続可能で平和な世界の実現に向けた提言を盛り込んだプレゼンテーションを行った。

国連関係者の方々、プレゼンを通してふたば未来生の取り組みや福島・日本の現状をよく理解できたと仰っていた。また、発表内容について、対話・交流の場を開くことの大切さ、そしてそこから生まれてくる新たな分断に立ち向かうための助言をくださった。生徒たちのこれからの取り組みに期待し励ましてくれる声かけの数々に、生徒たちは安堵しながらも身の引き締まるような思いだったと思われる。

現地での研修プログラムを一通り終えて、生徒からは「色々な経験と失敗ができて良かった」「周りのメンバーを尊敬できた」「人生が変わった」という感想があがった。



※3月17日(金)、3月18日(土)は移動日

(6) 成果と課題

チームビルディング

メンバー選抜において、自分の探究と地域・世界とのつながりについて志望理由書に書く必要があったことで、全員が探究活動の内容を深く振り返ることにつながり、それぞれの取り組みを深化させようという意識づけをすることができた。ドイツ研修に参加した者とそうでない者、海外渡航や国際交流経験の豊富な者とそうでない者等、多様なメンバーを選出したことで生徒間での学び合いが活発に生まれた。8人という少人数編成になったことでチームの結束力が高まりやすく、仕事をスムーズに分担することができた。

事前研修

事前研修は現地での活動を有意義なものにするべく、大きく分けて、①プレゼンテーション作成のために福島・世界のことを知る、②ディベート等を含めた英語によるコミュニケーション・思考の強化という2つの軸で行われた。

基本的にチームで協働して取り組むことで、チームプロジェクトの進め方を学び、実践するという経験が得られた。チーム間での連絡共有に Facebook グループを使用したこと、プレゼン等の作成に Google Document や Canva を使用したことで、アーカイブとしての機能を有しつつ同時作業で効率的にプロジェクトを進めることができたこと、関係教員からのフィードバックが容易であったことも1つの大きな成果である。

また、事前研修の内容に加えて、UNIS-UN 2023 のトピックであった教育の問題に関連するポスターを作成する課題・授業を行うなど、研修に参加していない生徒も巻き込んで思考を深めながら、研修生徒の学びを他生徒へ還元する役割も果たすことができた。

ニューヨーク現地での研修

全体を通して、英語でのコミュニケーション(特にリスニング)で困難を感じる機会は多く、生徒は英語学習に対する強い動機付けを得ることとなった。また、普段の授業においても、ただ原稿を読むようなものではなく、ディベート等で必要とされる即興性と論理的思考力に英語活用力を組み合わせさせたトレーニング等、より実践的な英語力を醸成する内容を考案していく必要性が感じられた。一方で、教科書で学ぶ基本的な英文こそがコミュニケーションの核となるということも併せて意識づけできると良いと感じた。しかし、生徒が研修の中で積極的に相手に話しかけたり言葉を発しようとしたりする姿が見られるようになったことは大きな成果である。

研修終了後に取得したルーブリックの自己評価からは、生徒が NY 研修を通して自身を大きく成長させることができたと感じていることがよく分かる。下記の資料は NY 研修に参加した8名の生徒のみを対象とした、1年次以降から取得しているルーブリックの自己評価の平均の推移である。NY 研修後の振り返りでは、すべての項目が大きく数値を伸ばしており、生徒自身も最も伸びたと感じる能力として特に B(+1.25), E(+1.25), G(+1.50), J(+1.13)を挙げている。研修を通して得られたモチベーションを高く維持して、今後の事後研修や学校・地域への学びの還元をしていきたい。

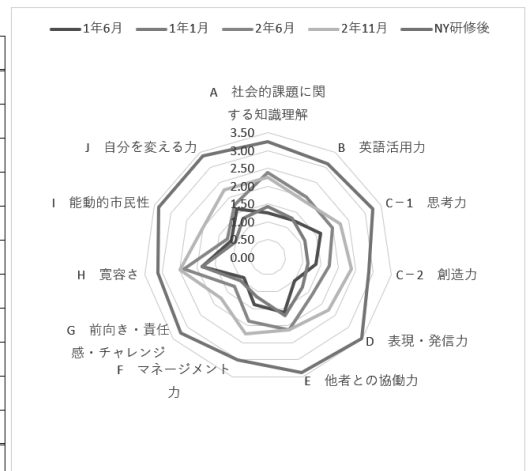
【生徒のルーブリック反省・感想】(一部抜粋)

- ・「研修の中でメンバーの良いところをたくさん見つけられたし協力できた。」
- ・「最初は何を言っているのかわからなくて会話も避けていたけど、後半になるにつれて聞き取れるようになっていった。」
- ・「プレゼン中、聴衆が良い反応してくれた事がとても嬉しかったため、これは自分もできるようにしたいと思い、メンバーと一緒に挑戦していた。」
- ・「ニューヨークの人にとっては相手の時間を無駄にしないことが礼儀(日本人の謙虚な性格は時間が無駄になる)と学び、テキパキと接するようになった。」
- ・「自分がやっている探究が、世界で起きている問題と共通点があることに改めて気づかされ、本当に全部他人事じゃないんだと思った。」
- ・(先輩へ)「心から頑張ってたよ良かったと思う。迷ってる人は絶対挑戦してほしい。」

※本校ルーブリックについての詳細は「第6章実施の効果とその評価」参照。

7期生 ルーブリック評価の推移 (2021年6月~2022年11月、NY研修)

	1年6月	1年11月	2年6月	2年11月	NY研修後	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.25	1.43	2.38	2.25	3.25	
B 英語活用力	1.25	1.29	2.00	1.88	3.13	
C-1 思考力	1.63	1.14	2.00	2.25	3.25	
C-2 創造力	1.38	1.14	1.75	2.38	2.88	
D 表現・発信力	1.00	1.29	1.63	2.25	3.50	
E 他者との協働力	1.63	1.71	2.13	2.13	3.38	
F マネージメント力	1.38	1.14	1.88	2.25	3.00	
G 前向き・責任感・チャレンジ	0.88	1.00	1.25	1.75	3.25	
H 寛容さ	1.88	1.86	2.38	2.50	3.13	
I 能動的市民性	1.13	1.00	1.25	2.00	3.38	
J 自分を変える力	1.63	1.29	1.75	2.25	3.38	
平均	1.36	1.30	1.85	2.17	3.23	



3. 4. 3 広島研修

原爆被害から復興した広島を訪問することで、過去を伝承する意味や、その困難さ、方法などについて考察するのが目的である。事前研修・事後研修では早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンターと共催する「1F地域塾」に参加した。

(1) 参加生徒

本年度より高校1年次のみでの研修となった。直前に参加予定生徒のインフルエンザ罹患が判明し、メンバーの入れ替えなどがあった。男女比は5:6であった。

(2) 事前・事後学習

事前・事後学習として第7～9回1F地域塾に参加した。1Fとはイチエフと読み、福島第一原子力発電所の通称である。戦災からの復興を果たした広島に行く前に、福島県・浜通りが抱える原発事故および廃炉事業の問題と未来について考察することを目的とした。詳細は本冊子の項目5.3に譲る。

(3) 実施内容(11月10～12日)

初日到着してすぐ広島県立国泰寺高校に向かった。2年生の探究の授業に混ざり、「ヒロシマ・フクシマの経験を後世に伝えるために必要なこと」「2030年のエネルギーミックスのグラフを作ろう」の二つの題でディスカッションを行った。緊張するふたば未来生を上級生でもある国泰寺生がリードしてくれ、思っていることを話すことができた。



夕方は平和記念資料館を訪問した。生徒の感想を紹介する。「正直、平和記念資料館が1番辛かった。大きく立ち昇るキノコ雲や水を求め空から降ってきた黒い雨に向かって口を開ける人の絵やその様子について描かれた文章。幼くまだあどけなかったであろう子供達のボロボロになった衣服や持ち物、それとともに綴られている遺族の思い出や深い悲しみ。火傷や放射線により蝕まれた見るに耐えない人々の体。それらの写真や絵、文章を見てもそれが78年前の広島で実際に起きたことだと頭が理解しなかった(…)人間が同じ人間に対してこれほどまで残虐になれるのかと思った。「一部文字があったであろうパネルの上から黒いシールが貼られていた。きっと

遺族からの意見があったのだろうと推測できる。仮に自分が遺族だったら、どうするだろうか。亡くなった人の遺品や写真の展示を許可するだろうか。ということを考えながら見てまわった。(…)広くこの悲劇を伝えられているのには、「遺族による展示の許可」という遺族の心情の犠牲があるからこそだ。

二日目は本校&早稲田大学企画の1F地域塾にも参加されている早稲田の高垣さんのガイドで平和記念公園フィールドワークを行った。彼の後輩の崇徳(そうとく)高校新聞部さんとも合流。爆心地、原爆ドーム、動員学徒慰霊塔、レストハウス(旧燃料会館)、原爆供養塔、韓国人慰霊碑、平和都市記念碑などのガイドを受けた。

生徒感想「たくさんの方が理不尽に命を落とした広島という地で「笑う」という行為すらしていいものなのかわからなくなった。また川を渡るための橋を渡れば、当時この川に皮膚がただれ苦しくて苦しくて仕方なかったであろうたくさんの人たちが飛び込んで死んでいったことを思い出して、辛かった。もう知れば知るほど、辛い気持ちが込み上がってきて心が沈んでいくばかりだった」。

被爆者講話として飯田さんという方からお話を聞いた。生徒感想「飯田さんの語りの強さから、



原爆が如何に衝撃的で悲惨だったが伝わってきました。飯田さんの話で一番衝撃的だったのは、原発に賛成することでした。つまり、核の平和利用です。私は正直、平和利用という言葉信じません。あれだけの人間の愚かさや学ばなさをこの研修、世界情勢を通して見えて、信じるというほうが難しいと思います。(…)飯田さんに「原発にはリスクが付きまとい、そのリスクを背負った福島は原発事故を起こしてしまいましたが、このリスクについてどう思いますか?」と質問をしました。とても失礼だと自覚はしていますが、その回答に絶望を覚えました。その回答とは「リスクがないものはない。」

リスクを怖がっていたら何もできない。現在、原発というのは安全性が高まり、このような事故が起きる確率は限りなく低い。だからこそ、核の平和利用が重要なのだ」と簡単にまとめると、このようなものでした。私には、この回答がリスクを背負う側から目を背けているようにしか思えませんでした。また、リスクを背負うのは原発を請け負う地域だけではなく、原発の燃料となるウランを取る人々も含まれます。確かに、原発の恩恵は魅力的で環境問題への視野を向けると必要になってくることは理解できます。「リスクがないものはない。リスクを怖がっていたら何もできない。」この言葉に同意します。しかし、リスクを押し付けあって得る恩恵とは何でしょうか。それは平和といえるのでしょうか。この研修で平和を学びに来たはずでしたが、平和がわからなくなりました」。

その後高垣さんが所属するカクワカ広島さんが経営されるカフェ、ハチドリ舎でお昼&ワークショップをして頂いた。ここでも崇徳高校さんがいてくださって良い交流となった。グループトークのテーマは「広島で学んで、福島原発事故を伝承するにあたって活かせることは何か」であり、サブクエスションとして①そのそもなぜ伝承するのか？ ②二つの場所が持つ課題の共通点は？ ③一緒にできそうなことはある？ という順番で考えを述べあった。最後の生徒が言った「もっと、もやもやしたい」という言葉が印象的だった。



感想を引用する。「そもそも何で伝承するのか」という問いが出た。(…) 私たちにとって伝承することが当たり前になっていて、その必要性や目的を疑うことすら忘れていることにも気づいた。これから自分たちにできることを考えた時、自分が原子力や放射線など福島が経験した出来事に関することを知らないことに気づいた。(…)

広島は核兵器の廃絶と平和の大切さを伝えていくのだろうと思った。それに対して福島はどうだろうか。全くわからなかった。地震や津波が起こったときのために備蓄したり、ハザードマップを確認したり、家族との連絡手段について考えておくことが大事？ …でも原子力発電所の事故は自分には無関係で何もできることはない。発電所の人たちに同じ過ちを繰り返さないように願うことくらいしかできない。正直、福島が経験したあの日の教訓が何なのかすら私にはわからなかった。それと同時に答えが出るまで考え続けたいと思った」。

「特に印象に残っているのは崇徳高等学校の生徒さんの平和教育に関する話でした。話によると、平和教育はあまり上手くいっておらず、行動に移す生徒はごく一部しかいないということ、若者の原爆に対する興味は年々薄れているように感じるということでした。(…)なぜ、こんなにも平和について考えさせられる資料が豊富なのに関わらず、興味関心が薄れてしまうのでしょうか。これは、私の完全な憶測なのですが、平和について考える資料が原爆だけだからだと思います。(…)自分たちが被害者だと思い込むのは危険です。もし、平和教育が原爆の被害を中心とした教育だとしたら、平和を被害者の視点からしか考えられなくなってしまってもおかしくないと思いました。被害者だけの視点の何がいけないのかというと、罪悪感をあまりもつことができないからです。原爆の被害者側は日本で、加害者側はアメリカです。アジア侵略の被害者側はアジアの国々で、加害者側は日本です。2つの文章ではそれぞれ違う感情を感じることができます。前文は、悲しみや苦しみ、虚しさなどです。後文は、罪悪感や忌避したくなる感情などです。このようなことを考えていくにつれ、平和を考えるには以上のことは必要不可欠なのではないかと思うようになりました」。

三日目は宮島を観光し、帰路についた。



3. 4. 4 会津大学・留学生との交流研修

(1) はじめに

会津大学の留学生との交流事業は 2022 年から今回で 2 回目となる。今年度は 2 日間とし、11 月 23 日（木）～ 24 日（金）に以下のコースを回った。会津大学からは留学生 22 名と教員 3 名、本校からは海外研修メンバーを中心に 15 名の生徒（本校への留学生 1 名含む）と教員 2 名が参加した。東日本大震災から 12 年が経過し、これまで福島が抱えてきた課題と復興への取り組みを直接体感し、振り返ることで今後の未来のために何ができるかを会津大学で学ぶ留学生とともにディスカッションを行った。特に本校では海外研修に参加する生徒の事前研修として位置づけられているため、福島の現状を海外の方に向けて発信するためのアイデアについて議論した。

【23 日（1 日目）】

- 10：00-12：00 東日本大震災・原子力災害伝承館
- 12：00-13：00 双葉産業交流センター（昼食）
- 13：10-14：10 請戸小学校跡地
- 14：20-14：50 大平山
- 15：50-16：50 J-Village における震災講話・施設見学

【24 日（2 日目）】

- 9：00-10：00 福島国際研究教育機構（F-REI）で講義
- 10：30-11：50 福島水素エネルギー研究フィールド
- 12：00-13：00 福島ロボットテストフィールド（昼食）
- 13：00-16：00 視察、振り返りワークショップ

(2) 実施内容

11 月 8 日にオンラインで事前ミーティングを行った。研修当日はグループでの活動・交流となるため、事前ミーティングでは自己紹介や現時点での興味・関心事項などを交流した。

23 日当日は東日本大震災・原子力災害伝承館で会津大学の留学生と対面し、グループごとに各所を視察した。

初日の伝承館ではふたば未来生が英語で自分から話しかけることは難しそうだったが、留学生の方から気さくに高校生に話しかけてくれたためバスでの移動中は英語で両者が会話してる様子が見られた。



↑ 請戸小学校跡地での津波で教室の壁の流されている状況



↑ 2 日目振り返りワークショップでの様子



↑ 2 日目 最終発表の様子

(3) 振り返りと反省

本校生・会津大学の留学生とともに実施後アンケートから満足度の高い研修内容だった。次年度以降のWWL事業をさらに進めるために、留学生との交流プログラムを更に充実したものにしていきたい。



3. 4. 5 米国高校生との交流（スペシャリスト）

(1) はじめに

今年度、GLOBAL CLASSMATE (BY KIZUNA ACROSS CULTURES) に採択され、高校1年次スペシャリスト系列の生徒30名が、アメリカのテキサス州にある Lake Highlands High School の生徒たちと交流をした。

Global Classmates とは

日米各38校が参加し、9月から翌2月までの約半年間、日米各20～30名ほどの生徒達が、語学や表現などの授業、国際交流の部活動などの場を利用して、継続的にメッセージや写真、ビデオのやり取りを行うオンラインプログラムである。

(2) 実施内容

① CANVAS 上でのディスカッション

交流先の高校生は、日本語を勉強しているため、日本語と英語の両方を用いた交流を行った。CANVAS というオンラインのプラットフォームを使い、2週間ごとにトピックを作成し、そのテーマについて日本語と英語で意見交換を行った。トピックは以下の通りである。



DISCUSSION TOPICS

- 1) 自己紹介
- 2) トレンド
- 3) 私たちの学校へようこそ！
- 4) 冬休みに何をしましたか？
- 5) あなたが一生のうちにやってみたいことは？
- 6) ファストフード
- 7) Farewell (最後のメッセージ)



DEIB TOPICS

交流の中盤では、より深い内容について議論する DEIB が始まった。DEIB の定義は以下の通りである。

Diversity (ダイバーシティ・多様性)

国籍、価値観、障害、スキル、経験など、さまざまな属性や背景を持った人たちが共存している状態のこと。

Equity (エクイティ・公平性)

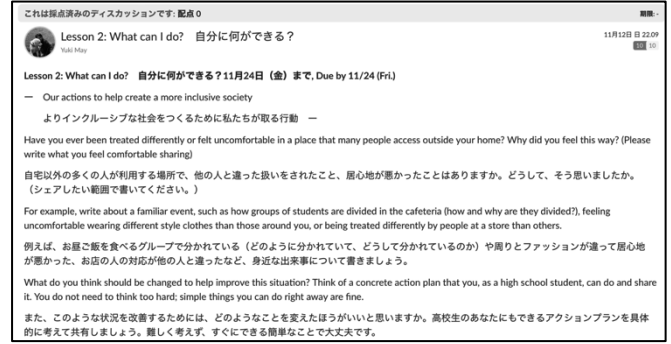
背景や属性に関係なく、すべての人が同じ機会に平等にアクセスできるようにすること。

Inclusion (インクルージョン・包括性)

背景の違いに関係なく、全ての人々が公正かつ敬意を持って扱われ、発言権を持てるようにすること。

Belonging (ピロニング・帰属性)

背景に関係なく、ありのままの自分が受け入れられ、評価され、歓迎されているとそれぞれが感じる状態のこと。



日本にいるとあまり感じる事のない「差別」について、LHHS の生徒の投稿を読み、服装や見た目で判断されたり、ちょっとしたことで偏見の目で見られたりすること、疎外感を感じたりすること等と、自分たちが日々感じる事と繋げて考えることができた。ALT と協力し、英語しか話さない部屋を作り、そこに生徒を1人ずつ入室させ、”out of place”を体験できるような授業を行った。生徒たちがどう感じたかをシェアした。その後、「これは、日本にいる留学生が日々感じていることだ」伝え、間接的に、自分たちの日々の行動を振り返る機会となった。

② おみやげ交換

omiyage exchange として、お互いにお菓子を送り合った。パートナーに手紙とプレゼントを用意して、箱に詰める様子や、届いたプレゼントを開ける様子をビデオにして送り合った。



一人一人にプレゼントが渡されると、丁寧に日本語で書かれた手紙に喜び、見慣れないお菓子をみんなでシェアしながら異文化交流を楽しんだ。

(3) 振り返りと反省

事前アンケートでは、英語が嫌い・苦手と回答した生徒が多く、英語学習のモチベーションに課題があると感じていた。しかし、交流が始まると、教科書とは違い身近な話題について意見交換をし、アメリカの高校生との共通点を見つけ、すぐに仲良くなっていた。事後アンケートでは、「もっと会話ができるようになりたい」、「英語に興味はなかったが、いつかアメリカに行って LHHS の生徒と会ってみたい」等、Global Classmates に参加したことによって全生徒の英語への学習意欲に変化があったことがわかった。

次年度開かれるグローバル・クラスメート・サミットの参加候補生徒の交流ペアの1校にも選ばれ、募集人数を超える生徒の応募があった。さらに海外との交流プログラムが充実し、生徒のモチベーションが上がるように計画していきたい。

3.5 外部発表・交流

3.5.1 START2023 (山形・東桜学館での発表)

(1) START2023 での発表

2023年7月22日、令和5年度山形県立東桜学館高等学校 SSH 事業「START2023 (国際プレゼンテーション大会)」に、本校3年次生徒のグループと、本校2年次生徒のグループが参加した。3年次生徒のグループについては、令和4年度ニューヨーク研修帰国後の事後研修を兼ねたプレゼンテーションという位置づけで臨んだ。日本全国とタイ、マレーシア、台湾から高校生たちのグループが集い(一部オンライン参加)、35の発表が英語で行われた。他校の発表の質の高さや英語力から受けた刺激は大きく、本校生徒の英語学習のモチベーション向上につながった。

○理系発表(2年次グループ)

How to Observe Soil Unused in Okuma Town Due to the Fukushima Nuclear Accident Then Enrich Greenery There

by Suzuka Hoshino, Koharu Yamazaki, Asuka Kato, Ayano Kimura

○文系発表(3年次グループ)

Give yourself an edge-up! ~The importance of learning English in a globalizing world~

by Asumi Kobayashi, Kazayuki Sugata

○参考

山形県立東桜学館高等学校ホームページ

「国際英語プレゼンテーション大会(START2023)を開催!」

<http://www.touohgakkan->

[jhh.ed.jp/archives/ssh_info/32547](http://www.touohgakkan-jhh.ed.jp/archives/ssh_info/32547) (2023/07/26)



(2) 2023年度駐日外交団による福島復興視察ツアーふたば未来学園訪問における発表

2023年8月2日、駐日外交団が本校を訪れた際に、3年次生徒が上記と同内容のプレゼンテーションをブラッシュアップし、再度発表を行った。加えて本校2年次の令和4年度ドイツ研修参加メンバーが、同研修の内容について発表を行った。

本校の探究活動や海外研修の取り組みを、自らの進路希望と結びつけて活動する様子について、各国の大使から高評価をいただいた。

3.5.2 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

(1) はじめに

標記のコンテストは、福島県内に在学する高校生が主体となっているグループまたは個人の社会貢献活動(地域や社会を良くしようとする活動)を対象としたコンテストである。ボランティア、復興、国際交流、まちおこし、製品開発などのほか、「地域や社会を良くしようとする活動」であれば、分野を問わず対象とされる。

(2) 実施内容

本年は社会起業部がコンテストに申し込み、本選へと進んだ。社会起業部では「知る」「伝える」「盛り上げる」を軸に、実際に現地を歩く、事実を自分たちの言葉で伝える、福島と他の地域を比較するなどの語り部活動を行っている。

知る活動では、震災で過疎化が進んだ広野町の限界集落への訪問や、宮城県の津波被災地での研修・同世代語り部との交流などを実施。伝える活動では県外の高校生・大学生との交流会に加え、実際に双葉郡を案内することもある。2022年12月の沖縄研修では街中で自分たちの活動を発信したほか、福島の原因と沖縄の基地問題を比較する対話も行い、多くの共通点があることも学んだ。盛り上げる活動としては、県内のテレビ番組と協働し、自分たちで撮影した広野町のPR動画を放送していただいた。また部長の企画により、寮生・留学生を対象とした双葉郡のバスツアーも実施した(写真)。



震災当時5歳だった生徒たちは「震災を知る最後の世代」として、震災を経験していない次世代や県外の方に記憶を伝承していきたいと、思いを発表した。

(3) 成果と課題

9月9日のコンテスト本選で発表し入賞した。

3.5.3 ふるさと創造学サミット

(1) はじめに

ふるさと創造学サミットは震災後に各町村・学校での「ふるさと創造学」の取組を発信したり、学びを通じて交流・協同することで地域のつながりをつくる行事であり、今回で10回目を数える。今年は初めて本校での開催となり、双葉郡8町村立小学校・中学校・義務教育学校、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校、福島県立富岡支援学校の児童生徒が一堂に会し、各校のふるさと創造学の取り組みを共有した。



(2) 実施内容

校内10の会場に分かれてセッションが行われ、本厚生は3つの発表を行った。発表タイトルは「私と檜葉とさつまいも」「自律神経を整える」

「福島の魚」とすべてスペシャリスト系列の生徒に発表をしてもらった。3人の生徒ともに探究学習で自らの興味・関心から生まれた問いからスタートし、それぞれの系列で学んだ成果を取り入れつつ発表を行った。



(3) 成果と課題

今回の発表会は小学生や中学生も聴衆として参加していたため、小学生でも理解できるように平易な言葉で自分の探究学習を説明する点がなかなか苦戦していたようだった。しかし、高校生の発表には多くの聴衆が集まり、とくに中学生の関心が高かった。双葉郡内の中学生に高校生の探究を知ってもらう機会がこのサミットしかないため貴重な機会となったが、この機会以外にも普段から探究学習を通じた交流を増やすこと重要である。

3.5.4 新潟WWL国際会議

期日：令和5年10月19日(木)～20(金)

場所：19日 スノーピークヘッドクォーターズキャンプフィールド・20日 三条高等学校

新潟県のWWL高校生国際会議に、生徒3名が参加した。

19日は、基調講演の後、事前に指定された16グループに分かれて分科会に参加。各グループでは、県内の大学に在学している海外留学生がファシリテーターを務め、国外提携校の同年代の学生はZoomで出席。

20日は、三条高校校舎に集合し、グループディスカッション体育館で代表者発表。本校からも1名が代表者発表を行った。

本校も国際会議を行う際は、地域の観光資源や、近隣大学の留学生などの人的資源を活用したい。以下は参加生のセルフエッセイ記述内容。

新潟の高校生の1人が「福島の風評被害はまだあるから…」と発言した。まさか同世代の高校生から福島の風評について聞くとは、と少し衝撃的だった。しかし、さらに衝撃を受けたのは、隣で話を聞いていた中国人の方からの感想である。「福島の魚は、危険だから、絶対に食べません。」「私の中国の友達も、福島の汚染水がこわくて心配しています。」私は動揺し、すぐに言葉が出なかった。その後何とか危険では無いことを伝えようとしたが、相手には全く伝わらなかった。分かった、そうか、いくら科学的根拠を添えて「安全だ」と主張しても、彼らにとっては「安全」と「安心」は違うのだ。風評払拭を実現するには、彼らにどう「安心」を届けるか、伝えていくかを考えなくてはならない。

県外・国外の同年代の学生と交流して初めて、自分たちが暮らしている地域がいまだに抱える課題に気づくことができた。本校がWWLに採択されている期間に果たすべき使命も見えてきたように思えた。

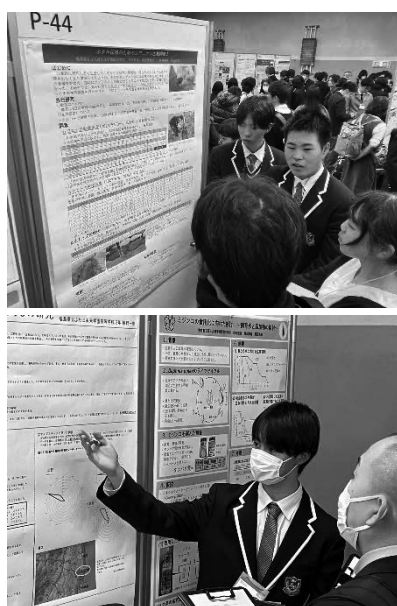
3.5.5 サイエンスキャッスル関東大会

(1) はじめに

今年度より探究ゼミの編成が変更になり、理系の自然科学地球環境ゼミが編成された。理系の探究として、データを収集・処理・分析し、数的根拠をもって検証する手法をしっかり身に付けていくことが重要である。また、様々な角度から物事を分析する視点を育てていくことも重要である。そのような観点から、本ゼミは校外の発表に積極的に参加することを勧めてきた。上記の大会には、事前の書類選考を通過した2探究、高校2年次生3名が参加した。

(2) 実施内容

大会は、令和5年12月2日(土)に昭和女子大学附属中学校・高等学校で開催された。本校からは、ポスター発表部門に、紺野一剣「五社山おろしの研究」、齋藤佑磨・古山寿智「ホテル保護のためのカワニナの生態調査Ⅰ」が出場した。発表時間の4分を十分にいかし堂々と発表し、審査員による質疑応答にもしっかりと自分の見解を示すことができ、素晴らしい発表だった。



(成果と課題)

ポスター発表部門は80の発表があったが、2発表と活動、またこれからの探究の方向性が明確であったことが評価されたようである。1つの事象を検証するための実験や検証活動がいかに重要であるかを実感した大会であった。大会後、ゼミ内で発表会を開き、探究をまとめていく上で大切な視点で共有した。



3.5.6 全国高校生フォーラム2023

期日：令和5年12月17日(日)

場所：国立オリンピック記念青少年センター

今年度は、コロナ禍・SGH時代から3年ぶりの対面開催。WWL事業校・SGHネットワーク校が集まり、ポスターセッションとグループディスカッションを行った。本校チームは、2年生3名、1年生1名で参加。

AM：生徒交流グループディスカッション

4人の生徒がそれぞれ別の会場で参加。テーマは、Diversity in my life, in your lives. 多様性について、自身の体験や考え、興味などについて英語でブレインストーミングを行い、各会場でミニプレゼンテーションを。本校生は各グループで中心的な役割を担い、自らの考えも発信した。

PM：ポスターセッション

4分間の英語でのプレゼンテーションの後に、4分間の質疑応答。審査員からは、4人それぞれの課題感について主に問われ、「コミュニティ」という言葉の共通認識について問われた。

準備から参加まで(分析)

ポスターを共同編集で作成し、ALTと生徒が連絡を取り合って原稿作成と発表・質疑応答の想定練習。結果、終日、英語でのやり取りには苦労を感じずに過ごした。本校生は、CEFRのB1~B2の英語運用力。グループディスカッションではそれぞれが中心的な役割を担ったことから、コミュニケーションに前向きに臨むことができていた。

次年度への課題

次年度の発表については、遅くとも10月中には参加候補生徒をピックアップし、探究活動そのものをブラッシュアップさせたい。自然科学ゼミのようなものでも問題はなく、学校全体で一つのプロジェクトを成すようなポスターではなく、生徒の探究活動のサイクルの中の、少なくとも1プロジェクト目の考察まで済ませたものを発表させたい。発表4分という設定はおそらくそのためである。実施後の考察と次の課題発見まで行い、英語での質疑応答も今年度等のレベルまで磨いてあることが望ましい。

3.5.7 マイプロジェクトアワード福島県 Summit

マイプロジェクトアワード福島県 Summit は全国 Summit に向けた福島県予選として、今年度で4回目の開催となる「学びの場」である。本校からは1年生11件、2年生16件、3年生1件の計28件が参加した。

実施日：令和6年1月27日(土)終日

実施形態：オンライン

参加プロジェクト数：48件

1. マイプロジェクトアワード福島県 summit 発表リハーサル会

今年度は発表本番に向けたリハーサル会を実施した。当日は13名の生徒が参加し、生徒同士で発表の良い部分や改善点をコメントしあうことで、「自分ももっとデータを入れて説明したい」、「私もこれからもっとアクションをしたい」等という意見がみられ、自身の活動や発表を客観的に振り返る機会となった。また、リハーサル会から本番までの数日間、放課後の時間を活用し、お互いに発表しあって改善案を話し合うなど、最後まで自身の発表をブラッシュアップしあう姿が見られた。



2. マイプロジェクトアワード福島県 Summit

当日生徒達は分科会に分かれ、自身のプロジェクトの発表を行った。分科会では、福島県にゆかりの各分野の専門家や、起業家の方々、他校の生徒から質問や感想をもらい、活動内容について対話を行った。発表終了後の振り返りでは、自身の学びや気づきを言語化するとともに、今後の活動について考えた。

普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、さらなるモチベーションにも繋がったようだ。



3.5.8 第23回福島県総合学科 生徒研究発表会

(1) はじめに

第23回福島県総合学科研究発表会が本校アリーナ1で開催され、福島北、二本松実業、光南、小野、会津学鳳、いわき総合、相馬総合、ふたば未来学園の8校の代表生徒が参加した。この発表会は県内の総合学科の高校全9校が集まり、毎年各校持ち回りで開催されている。



(2) 展示発表部門 (午前)

午前中はアリーナ1で展示発表部門が開催された。発表時間4分間でポスターを用いたの発表や成果物の展示を行い、全体で15の発表が行われた。本校からはスペシャリスト系列商業3年の高野睦斗が「福島の魚」、スペシャリスト系列工業3年の上田大雅が「廃材を使って、エレキギターを作ろう！」をテーマに発表した。

(3) 口頭発表部門 (午後)

午後は各校からの代表者8名がプレゼンを行った。本校ではスペシャリスト系列農業3年の佐藤愛心が、「私と檜葉とさつまいも」と題し、発表した。



(4) 結果 口頭発表部門 優秀賞 (佐藤愛心)

本校からの観覧者としてスペシャリスト系列の全ての生徒と、アカデミック系列1年の生徒が参加し、他校の発表も含め、多くの取組を聞いた。特に1年次生はこれから本格化する探究活動の参考となった。

3.6 社会起業部の活動

3.6.1 社会起業部活動

社会起業部（本部）は双葉郡や福島県を「知る・伝える・盛り上げる」をモットーに他県から訪問する高校生・大学生と交流活動や動画製作等をしている。ここ数年は県からの補助金（チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業）を得て、夏季に一泊の研修（宮城で津波学習）、冬季に二泊三日の研修（2022年沖縄研修・2023年水俣研修）を行っている。

（1）地域を知る活動

広野町の限界集落・箒平地区や、双葉町のフィールドワークを行った。

（2）地域を伝える活動

留学生を含む寮生を案内した「双葉郡ツアー」の企画や他県の学生との交流を行った。交流相手は以下の通りである。横浜市の緑ヶ丘高校（7月21日）、三重県各地の有志の高校生（8月9日）、滋賀県の河瀬高校（8月22日）、早稲田大学の大学直営国際学生寮WISHの学生さんたち（8月24日）、大阪の高石高校（10月18日）、埼玉の大宮国際中等教育学校（1月16日）。

（3）地域を盛り上げる活動

福島放送と協働で夕方の情報番組「シェア！」で使用する動画を作製した。また、部員+αで只見線全国高校生サミットに参加し、12月10日のプレゼンテーション大会では最優秀賞を受賞した。

（4）県外研修

①宮城研修

8月3～4日、津波被害学習のため宮城研修を行った。参加した生徒は6名。初日は気仙沼リアス・アーク美術館で津波資料実物を見たのち、南三陸311メモリアルではラーニングプログラム「生死を分けた避難」を受けた。

二日目は投宿したホテル観洋さんの方がバスに乗り込んで戸倉地区および高野会館を案内していただく。単に避難マニュアルに従うのではなく、その場その場で危険を正しくイメージできるかが生死を分けた、ということが分かった。その後石巻に移動し、多くの児童が亡くなった大川小学校でお話を聞いた。

②水俣研修

福島の原因事故は核の問題としては広島的であり、NIMBY 施設としては沖縄の米軍基地的であり、環境問題としては水俣的であるといえる。社会起業部では冬季に水俣と沖縄を2年かけてフィールドワークを行っており、

2022年末には沖縄研修、2023年の12月20～22日は水俣研修を行い11名の生徒が参加した。

初日は水俣病資料館を見学した。生徒は事前学習を踏まえて、水俣の歩みや実際の患者さんの思いに心を寄せているようだった。

二日目は一般財団法人水俣病センター相思社のNさんに同行していただきフィールドワークを行った。

水銀ヘドロを埋め立てたコンクリートの耐用年数が迫るなど、いろんな不安が残っているが、海は確実に再生されていること、慰霊碑の下に名簿があるが、差別があった歴史から名簿に名前を入れるのを嫌がる遺族もいること、新潟水俣病患者の昭和電工に対する裁判がなければ水俣病も「和解」させられていたこと、市税の60%以上を収める大企業チッソに対する告訴は市そのものを敵に回すことになったこと、等を学んだ。

昼食後は相思社の考証館を見学した。考証館で伝えたいのは正義ではなく正義との間にある葛藤、という言葉が印象的だった。夕方は水俣病患者でもあり、福島の処理水にも言及してくださっている杉本肇さんのお話を聞いた。水俣研修の詳細及び社会起業部の活動は右QRコードのFacebookに記載してある。

ホテルでの振り返りでは生徒は以下のような感想を出した。「水銀含有の土が入っているエコパークと福島の間貯蔵施設との類似性に気づけた」「加害者の立場に立つことも重要。分断を避けるためにどうすればよいか考えられた。これからの



学びに活かしたい」

3. 6. 2 社会起業部カフェチーム

(1) はじめに

本校社会起業部は、「地域を知る・伝える・盛り上げる」を目的とし、本部・カフェチーム・製造班の3つに分かれてそれぞれの特長を生かした形で目的達成に向け活動している。その中でカフェチームは、学校内に設置されたカフェ“caféふう”を活動の拠点とし、カフェの運営やイベント企画を中心として学校内・外での活動に取り組んでいる。2年生1名、1年生9名の計10名の部員が「変化 交流 居場所を作るカフェ」のコンセプトのもと、学校内のカフェにとどまらず、学校外においても地域とどのような関わり方ができるかを模索しながら活動している。

(2) 実施内容

“caféふう”は、一般社団法人たんぼぼを経営母体とし、校舎内にあるみらいラボの一角に2019年6月にオープンした。カフェチームは、“caféふう”にて、週3日のカフェの営業や運営、カフェでできる企画の立案など様々な活動を生徒が主体となって行っている。

カフェは、週3日の生徒営業日は一般の方の利用も可能なことから教職員や生徒など学校内のみならず学校外の方とも多く接することができ、高校生としては貴重な実学に沿った学びを得ることができる。昨年度に引き続き、今年度も学校内のみにとどまらず、学校外にも足を運び地域のイベントに出店するなど学びの場を広げて活動した。

冒頭にもあるとおり、「地域との関わり方」を模索しているカフェチームは現在、双葉郡内で自分たちに何ができるか、自分たちの可能性は一体何であるのかの問いに対する解を迫している。まずは、自分たちが双葉郡を学ぶべきという考えから、双葉郡の文化や伝統について研修を行ったり、双葉町の復興に携わっている方とともに双葉町の活性化に向けて意見交換をしながら新しい取組に挑戦する準備をしているところである。

(3) 成果

・社員総会 5/29 (月)

カフェの経営母体は「一般社団法人たんぼぼ」である。法人であることから、定例の社員総会を行い、そこで理事改選や各種報告・検討を毎年5月に行っている。今年度の総会には、代表理事をはじめとして理事(教職員・生徒)や部員など計17名が出席し、法人理事の改選、決算報告、予算案の提示などを行った。司会進行も含めすべて生徒主体で行い、社員総会自体も生徒の学びとして吸収できる場とした。

・双来祭 6/25 (土)

新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い校内での飲食制限が緩和され、3年ぶりに双来祭でカフェとして参加することができた。双来祭でのカフェ活動は部員全員が初めてのことであったため、想定を上回る来客に焦りながらも日頃の活動経験から繁忙時にどのように行動すれば他の部員も動きやすいかをお互いに考えて活動している様子が見られた。1年生は入部して3か月足らずと少ない経験も関わらずお互いに助け合い声掛けを行う姿が

多く見られ、短い期間での大きな成長に今後の活躍を期待する。

・ふたばワールド in おおくま 2023 10/7 (土)

東日本大震災で一度途切れてしまったふたばワールドであるが、全国に避難した双葉地方の住民の交流の場として、故郷ふたばの絆を結ぶ機会として平成25年に復活した。双葉郡に元気を届けたい我々カフェチームは毎年参加させていただいており、1年生にとっては初の校外出店となった。今年度は東日本大震災の影響を特に大きく受けた大熊町での開催であり、復興への想いを込めながらそれぞれの部員が懸命に活動した。イベントでは、農業科が製造した「大熊町のいちご」、「大熊町のキウイ」を使ったドーナツを双葉郡の魅力や頑張っている姿勢を発信すべくお客様に一言添えながら販売した。

・ならSUNフェス in 2023 11/11 (土)

昨年度に引き続き檜葉町にてイベント出店を行った。農業科の「檜葉町のユズ」を使ったドーナツを販売し、イベントに訪れた檜葉町の方や町外の方に改めて檜葉町の魅力について意識していただくきっかけになればという想いも込めて活動した。昨年度と比べて来場者がとても多く、我々カフェチームの活動についても知っていただく良い機会となった。

・広野町暮市 2023 12/24 (日)

今年度も広野町駅前商店街の活性化と賑わいづくりのために開かれる「広野町暮市」に出店させていただいた。気温が氷点下の中、日頃からお世話になっている広野町への恩返しのためにと心を込めて接客・提供を行った。

「高校生がやっているお店なんてあるんだ」、「学校にカフェ？本当に!？」というお客様の声に、まだまだ自分たちの活動が広まっていないという反省をしつつも、たくさんの方から「頑張ってるね」、「今度学校のお店に行くね」といったあたたかいお言葉をいただき、今後の活動に対する意欲を新たにすることができた。



←パンフレットを用い
caféの案内をしている
部員

オリジナルコーヒー
「ふうブレンド」を
丁寧に淹れる部員→



(4) 課題

昨年度に引き続き、「SNSによるタイムリーな情報発信」と「交流の場としてのカフェのあり方」が課題である。イベント出店時のSNS利用はもちろん、「学校の中だから一歩踏み出しにくい」という意見を超越して、行ってみたいくなるようなカフェの魅力や日常的な情報発信により備えたい。

また、今後は地域の文化や伝統を取り入れた生徒主催の企画開催により外部の方を呼び込むことで交流の場としてのカフェの機能を十分に果たせるよう努力していきたい。

3. 7 未来研究会

変革者としての生徒の資質能力の向上と、教員の指導力向上のために行われてきたのが本校の現職教育「未来研究会」である。地域・世界の中の学校として、どのようなカリキュラムが実現されるべきかについて、その具体策について教職員同士が議論を行い、外部から講師を招待しカリキュラムの実現に必要な知見を得る機会として開校当初から行われてきた。しかしながら、中高一貫校の本格導入となる令和4年度よりアカデミック系列では7校時授業が導入され、それに伴う生徒の放課後の活動時間が短くなることや会議の持ち方、本校教職員の多忙感の解消(Teacher's Well-beingの実現)などの問題点が顕在化している。

(1) はじめに

今年度からWWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業が3カ年で始まることから、令和5～7年度の短期目標の共有を行った。これまでのSGH (スーパーグローバルハイスクール) 事業や地域との協働による高等学校教育価値推進事業(「グローバル型」)の8年間で探究学習の指導方法の確立やその指導方法を県内外へ発信する事業についてはある程度の成果を見ることができた。今年度以降はWWL事業への移行に伴い、更に高度な学習のあり方や従来からの懸案事項となっていた文理融合型のカリキュラム開発や教科学習と探究の往還関係の構築により軸足を置く方向で未来研究会の重点目標とした。

(2) 実施内容

今年度実施された未来研究会は以下の通りである。

① 第1回未来研究会 (4月6日)

最初の未来研究会ではWWL事業への以降に伴い、WWL事業の趣旨や3年間のロードマップを確認した。特に令和6年度は本校開校10年目となり、三島長陵校舎で学ぶJFAアカデミーの生徒たちが帰還する年である。また、令和7年度は東日本大震災から15年目となり、WWL事業の完成年度として高校生国際会議の実施やWWL研究成果発表会などの大きな行事も多くなる。まずは、令和5～7年度のWWL事業期間の3年間に関するロードマップと短期目標の確認を全体で共有した。

WWL事業のロードマップ



その後、今年度新たに探究の指導をする着任者も多かった事から、これまで行ってきた「未来創造探究ステージと関わり方全体像」について確認し、チェックリストを用いて生徒伴走スタンスの再確認を行った。内容は①自身が関わった生徒で、探究指導がうまくいった or 多く関わった1人を思い浮かべる、②その生徒への関わりを振り返り、ワークシートを記入するという内容である。

指導・伴走スタンスの開発

② 着任者双葉郡課題把握フィールドワーク (4月6日)

午前の未来研究会終了後に、今年度着任者はバスで双葉郡のバスツアーを行った。ふたば未来学園で働く先生方に双葉郡が置かれている現状と地域復興の進捗状況を体験してもらおうツアーであり、開校後毎年行われているものである。



③ 第2回未来研究会（11月7日）

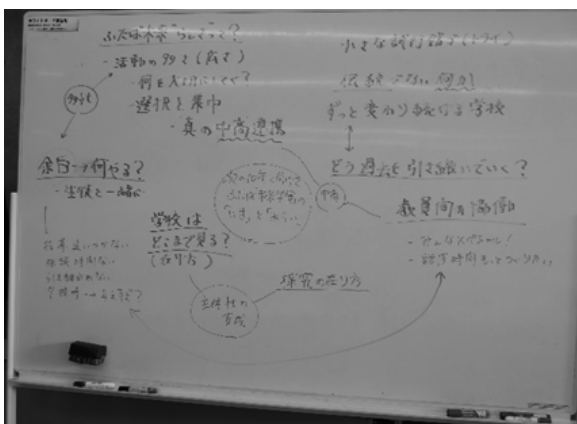
第2回目の未来研究会では、スクール・ポリシーの検討が中心であった。年度当初の未来研究会では3年間のロードマップを確認したが、次年度の令和6年度は開学10年目の年となり、令和7年度には東日本大震災から15年目の年となる。ここから、「ふたば未来学園のいまとみらい」をテーマとして、ワールドカフェ方式での対話を行った。最初に、開学から9年間の歩みの写真をヒストリー・ウォーク方式で振り返り、これまで（過去）を振り返った。次のワールドカフェでは「ふたば未来のいまとみらい」「変わっていくこと・変えていくこと・変わらずに大切にしたいこと」をあげながら、議論をした。



<全体の方向感>

- ・学校らしさ（ふたば未来らしさ）を改めて言語化することが今一度必要ではないか？
- ・多忙化の議論なども、それを踏まえて取捨選択できると良いかもしれない。
- ・学校らしさを具体化していくことで、指導へのやりがいの増加、多忙化の解消に繋がれるのではないかと？
- ・ふたば未来学園にとってこの10年は、学校が設立される前も含めて「大人が頑張った10年だった」と感じている。だからこそ、次の10年は子どもたちとともに作る10年に出来ると良いのではないかと？

<議論中のメモ（キーワード）>



- ・「選択と集中」
- ・多忙感 → 余白（生徒と一緒に取り組む）
- ・学校はどこまでできるのか？
- ・真の中高連携

<今後の議論していく上でのポイント>

- 1) 「変革者」という言葉について
 - ・「変革者たれ」という意味には「自己を変革する」（＝成長）と捉えることも出来る。ある意味「変革者たれ」という言葉は、自分の成長に真摯であれと言い換えることも出来るかもしれない。
 - ・「変革者」という言葉については、変革したという結果だけを指すものではなく、試行錯誤しながらいろんな方面で何かを変えようとする姿そのものを「変革者」と解釈できることも出来るのではないかと？
 - ・「変革者となるために何を学ぶことが必要なのか」という視点で生徒にあまり話をしていないかもしれない。
 - ・学校の中で「変革者」の解釈可能性が高いことが指導の難しさにつながっているように考えられる。
- 2) 教員の多忙化について
 - ・多忙感ほどのグループでも異口同音に語られていた。
 - ・多忙化によって、生徒との時間が十分に取れていないのではないかと感じる先生が多かった印象。
- 3) WWL 事業について
 - ・WWL 事業にあるような「グローバル」については、英語科だけで取り組むべき問題じゃないのでは無いか？例えば、数学・理科などでもそれを考えていく必要があるように考えられる。
- 4) 生徒のメタ認知力を高めるには
 - 11月に本校教員3名が堀川高校への先進校視察を行った。この視察での一番の学びは、学校内のすべての活動が繋がっていて、それらすべてが「探究」というものにつながっているということであった。生徒が主体的に学ぶために教科の学習と探究学習がお互いに繋がっていることが重要であり、本校が掲げている「探究と教科の往還関係」に通じる話である。堀川高校の生徒は探究と教科学習を切り分けることなく学ぶことを重視し、かつ自分の学習の成果を定期的に振り返る「学びのアセスメント」の時間を取っている。自分の学習状況をモニタリングしたり、他者との協働の中で自己の学び方を絶えずアップデートする活動が学びに対する自己のメタ認知を高める方策であると考えている。未来研究会の中でも、「学校は何をどこまでやるか」という話がでたが、教員が学びを与える物量作戦ではなく、生徒自ら学びを取りに行ける方策を考える中で、学校の役割を明確にすることの重要性が改めて注目された。学校の役割を明確にし、生徒が自らすることと線引きをすることで、学校の多忙化解消と教員が本当にやりたい活動に取り組む時間の捻出ができるのではないかと考えている。